

二〇一一年一月 出エジプト記

三橋 正*

はじめに

二〇一一年一月三十一日、エジプトの大地から私を乗せた飛行機が、地中海の上を飛んだ。周りはほとんどドイツ人。それでも、私はこの上ない安堵感を味わった。ハルダカ空港で何とかミュンヘンに行くドイツのチャーター便に潜り込み、争乱が続くエジプトを離れることができたからである。滞在はわずか四日間であったが、入国した二十七日に首都カイロでムバラク大統領の退陣を求めるデモと軍隊が衝突して死者が出るなど、誰も予想しなかった方向に事態が急転し、絶えず自らの安全を考えなければならぬという緊張感の中で行動が求められていたので、ここでの体験は数ヶ月分のように感じた。そして、チュニジアのベン・アリ大統領（一月十四日に国外へ脱出）に続いて、民衆の力で三十年にわたるムバラク独裁政権に幕が下ろされるかも知れないという歴史的

な転換点に遭遇した一歴史研究者として、この体験を記録すべきだと思いい、筆を執ることにした。また、単なる脱出劇ではなく、エジプトでの出来事とそれを通じて私が考えたことを刻銘に記することが、旅先での危機対処法という観点のみならず、エジプトの政治・社会・経済・生活・文化を理解し、そこから浮かび上がる文化論や比較文化学構築へと繋がると考えた。まだ十分に情報を整理していない段階での執筆で、少し冗長になるかも知れないが、お許しいただきたい。

一 プロローグ エジプト滞在予定

比較宗教史を一つの大きなテーマとした特別研究の期間を明星大学から得て、一年間（二〇一〇年四月から二〇一一年三月まで）のロンドン滞在を決めた私にとって、エジプトの史跡を実見することは大変重要で、今年一月末から二月にかけてのエジプト訪問も当初からの研究計画に入っていた。だから、昨年三月の日本出国前に、ワンワールドの世界一周（エクスプローラー）⁽¹⁾でブリティッシュエアウェイズのロンドン・カイロ往復便を手配していた。そして、昨年十月頃から詳細を詰めて、最終的に次頁のような日程を組んだ。

今回のような二週間を超える長期出張の場合、旅行会社に旅程を組んでもらうこともあったが、今回は、私の意図を理解してくれる良い旅行会社が見つからなかったこともあり、まったく個人で手配した。到着日こそ空港での四時間滞在でアブシンベルへ移動するという少し厳しい予定であったが、その後は、アスワン二泊、ルクソール四泊、ダバブ三泊、アレクサンドリア三泊、カイロ五泊と、各都市でゆとりのある日程を作った。かつてイスラム過激派のテロなどが起こったこともあるという国

エジプト訪問予定表

1月27日(木)	17:00	(イギリス時間) BA155 ロンドン・ヒースロー空港発
	23:40	(エジプト時間、時差+2時間) カイロ空港第1ターミナル着
28日(金)	4:00	MS110 (エジプト航空) カイロ空港第3ターミナル発
	6:40	アブシンベル空港着 (アスワン空港経由)
		シャトルバスで往復 アブシンベル神殿(大・小) 見学
	10:40	MS415 アブシンベル空港発
	11:15	アスワン空港到着
		タクシーで市内へ
		Pyramisa Isis Island Aswan 2泊
29日(土)		アスワン (クヌム神殿・岩窟墳墓群・聖メシオン修道院等) 見学
30日(日)		アスワン→(コムオンボ・エドフ・エスナ見学) →ルクソール
		St. Joseph Hotel Luxor 4泊
31日(月)		ルクソール神殿・博物館・カルナック神殿等見学
2月1日(火)		王家の谷・ハトシェプスト女王葬祭殿等見学
2日(水)		テンデラ・テルエルアマルナ・アピドス遺跡等見学
2月3日(木)	7:25	MS428 (エジプト航空) ルクソール空港発
	8:15	シャルムイッシュェーフ空港着
		ダバブへ
		Dahab Plaza Hotel 3泊
4日(金)		シナイ山・聖カトリナー修道院見学
5日(土)		予備日
6日(日)		ダバブ→シャルムイッシュェーフ
	21:30	MS418 (エジプト国空) シャルムイッシュェーフ空港
	22:45	アレクサンドリア空港着
		Shraton Montazah 3泊
7日(月)		アレクサンドリア図書館・国立博物館・グレコローマン博物館等見学
8日(火)		サーンイイルハガルのアムン大神殿等見学
9日(水)		アレクサンドリア→カイロ
		Safir Hotel Cairo 5泊
10日(木)		考古学博物館・ギザ等見学
11日(金)		ダフシュール・メンフィス・サッカーラ等見学
12日(土)		メイドゥーム・聖パウロ修道院等見学
13日(日)		オールドカイロ・イスラム地区等見学
14日(月)	8:50	BA154 カイロ空港第1ターミナル発
	12:00	(イギリス時間) ロンドン・ヒースロー空港着

てから決めるようにした。基本的に英語が通じる国であり、現地の実情に応じて柔軟な対応をするのが良いと考えたからである。だから、多くの人から勧められたアスワン↓ルクソール間のクルーズ船をはじめ、団体で行動するようなツアーは組み込まなかった。そして結果的には、旅行会社を介さず、一切を単独行動にしたことが、今回の脱出劇（危機回避）に大きな意味を持った。

二 二十七日（木）エジプト入国と最初のエジプト洗礼

一月二十七日（木）午後一時半、予定通りロンドンの自宅を出て、バス・地下鉄を乗り継いでヒースロー空港第五ターミナルへ到着。搭乗・出国の手続き、荷物検査を経て、三時頃にブリティッシュエアウェイズのラウンジへ入った。前日から日本の原稿の校正に追われ、出発直前に



情を考慮して、滞在は安全かつ落ち着きのある高級ホテル、長距離の移動にはエグゼクティブクラスでのフライトを予約した。

訪問地としては、古代エジプトはもちろん、初期キリスト教の展開やイスラム教の現状を理解できるように計画したが、詳細は到着し

やっとEメールで出版社に返送できたという有様であったから、迂闊にも自宅で午後のニュースを見ていなかった。そして、ラウンジのテレビで、同月二十五日から続いていたカイロのデモが大きくなったことを知った。しかし、ニュース報道はデモが整然とした平和的であることを伝えていたし、日本の外務省の「海外安全ホームページ」でもエジプトに対する危険情報は「十分注意してください」という程度（前日に発令されたものと同内容）であり、かつ、私がカイロ市内に入るのは十日以上も後のことだったので、そのまま飛行機に乗ることにした。

ほぼ予定通り午後五時過ぎに離陸し、約四時間四十分のフライトで、カイロには現地時間（イギリスと二時間の時差）の午後十一時四十分に着した。もちろん、上空からの夜景は、他の都市と変わらなかった。



夜のカイロ空港第1ターミナル

空港も異変はなく、なぜか出国審査を受ける前の所にも旅行会社の関係者らしき人々が迎えに来ていた。先ず、銀行（換金所）へ行き、二〇〇ドルを換金（約一二〇〇エジプトポンド）、合わせて一五ドルで入国ビサのシールを購入した。そして、入国審査の列に並んでいた時、後の男性が「この列はなかなか進まないね。」と声をかけてきた。話をしてみると、彼はエジプトの外交官で各国の大使館を回っているとのこと。早速、エジプトの情勢不安について尋ね

ると、外国人には絶対危害が及ばないから大丈夫だと言う。この時点で、私が危機回避プランの第一に考えていた、カイロ空港到着と同時に復路のフライトを変更して帰るという選択肢はなくなった。また、その外交官に「私は初めてのエジプトで、これから第三ターミナル発の国内線に乗り継ぐのに不安がある」と伝えると、彼は一緒にホールに出て、シャトルバスでの移動方法を尋ねてくれた。ホールでは、早速、十人ぐらいからタクシীর勧誘を受けたが、彼のおかげで無事に切り抜けられ、バス乗場へと案内された。

私が最初のエジプトの洗礼を受けたのは、この後である。

第一番目の訪問地をエジプト最南端の観光地アブシンベルとしたが、カイロからの飛行機は早朝の便しかない。私は、出国手続きなどに時間がかかることを考慮し、ホテルをとらずに、到着から約四時間後の二十八日（金）午前四時発のフライトを手配していた。この国内線を運営するエジプト航空は最新の第三ターミナルを使っている。時間には十分余裕があったが、初めての空港で徒歩での移動は難しく、シャトルバス（無料）を利用することにしたのである。

しかし、シャトルバスの乗場とはいっても標識があるわけではない。しかも真夜中。誰も危害を与えそうな人は近くにいなかったけれども、不安の中でバスの到着を待った。十分ほど経っただろうか、「第三ターミナル」と電光掲示されたバスが来た。ほっと胸をなで下ろしたその時に、隣にいた青年が「第三ターミナルへ行くのか」と声をかけてきた。小綺麗な格好をして、いかにも親切そうな人である。「そうだ」と答えると、「自分も行くのだけれど、このバスは乗り換えなければ行けない。一緒に付いてくれば大丈夫だ」と言う。この時点で、バスの運転手に確認しておけば良かったのだが、不安から解放された時のことで、彼を信

じてしまった。

彼は、飛行場で働いているとも言い、さらに親しい言葉で和ませてくれた。その間もバスの行き先を注意して見ていたが、料金を出した後、バスターミナルらしきところで停車、ここで乗り換えするという。下車すると、またタクシীর勧誘が来るが、それは彼がアラビア語で追い払う。彼について行くと、「第一ターミナル」と掲示されたバスがあり、それに乗ると言う。私は、危害を加えられてはいけないので和やかに話をしていたが、この時点で「やられた」と確信した。今回は、運転手に「第三ターミナル」へ行くことを確認して乗車。すると、前にいた第一ターミナルのバス乗場へ戻り、また同じ料金を通過する。この間、彼は「掲示と行き先が違う。エジプトはクレイジーなんだ！」と言う。おまえがクレイジーだと心で叫びながらも、従うことにした。無事に第三ターミナルに到着すると、彼は「これは到着の場所、出発は上だ」と言い、ビルの中に入らずに、脇の通路から上って行く。中から行けないはずはないと思いながらも、彼に従い、出発ゲートの入口近くに着いた時、案の定、彼はお金を要求してきた。私は、こんな時のためにと換金所で用意しておいた貨幣で二ポンド（約三二円）を渡す。「こんなに少ないの」と言う彼に対し、にこやかに「ありがとう」と言って別れた。

人をだまして遠回りさせ、善人のふりをして金をせびる。もしかしたら、彼はそれを生業にしているのかも知れない。出発前にエジプト通の人から、エジプト人はあの手この手で個人旅行者からお金を巻き上げようとするから気をつけろと言われていたが、この手があったかと感心して笑ってしまった。被害が少額であったことに加え、時間つぶしになったことも事実で、良い勉強をさせてもらったと考えてあまり怒りもしなかった。しかし、これは最初の洗礼に過ぎず、お金を巡るエジプト人と

の戦は、滞在中、最後まで続くのである。

三 二十八日（金） アブシンベル

第三ターミナルでチケットの確認や荷物整理をし、しばらく待っていると、搭乗手続きが始まった。午前二時頃であったと思う。そして、ビジネスクラスのラウンジに行くと、空港の平穏さとは裏腹に、カイロ市内でデモは拡大して与党である国民民主党（NDP）の本部を炎上させ、軍隊と衝突して少なくとも九名の死者が出たとのテレビ報道が流れていた。ムバラク大統領が（内閣を総辞職させたものの）退陣しない意向をテレビ演説したのが引き金になったようだ。すでに警察は姿を消し、軍



アブシンベルの夜明け



アブシンベル大神殿（左奥）と小神殿（右手前）

のみが治安の維持にあたっていた。⁽²⁾ 後で知ったが、この時にカイロの考古学博物館も襲撃され、ミイラ二体を含む文化財が破損されたという。もしかしたら（実際にそうなのであるが）私はエジプトに来てその象徴ともいえるピラミッドを見ないで帰る数少ない旅行者になるのではとも考えたが、⁽³⁾ 上ナイル（エジプト南部）の観光地まで急に飛び火することはないだろうし、いずれはチュニジアと同様にムバラク大統領が辞め、デモも沈静化の方向に向かうだろう、などと楽観視していた。実際、私が乗った飛行機は団体旅行者でいっぱいだったし、日本人もいた。隣の席に座った高年の女性（確かフランス人）は、一週間アブシンベルに滞在するという。少なくとも、私の周辺に緊張感をもって事態を憂慮しているような人は一人もいなかった。

飛行機は予定通り午前四時に離陸。アスワン空港で一度乗客を降乗させてまた離陸。すると空が明るくなり、赤茶色の砂漠と壮大なナセル湖（アスワンハイダム建設による人造湖）が見えた。そして三十分後、着陸準備に入ってまもなく、上空からアブシンベル神殿が確認できた。六時四十分にはアブシンベル空港に着いた時、ちょうど大地から太陽が昇る。シャッターを切りながら、深くエジプトの空気を吸い込み、古代文明への旅が始まったことを実感した。

空港と神殿の間は、無料のシャトルバスが出ている。私は、神殿見学後に同じ空港からアスワン空港に戻るチケットを手配していたので、帰りの時間を確認してから、他の団体客と一緒にバスに乗った。

アブシンベル神殿は、新王国時代第十九王朝のラムセス二世が岩を割り抜いて建造した古代エジプト最大の神殿で、太陽神ラーを主祭神として自らも神格化させてまつる大神殿と、ハトホル女神を祭神として王妃ネフェルトアリのために建てた小神殿とからなる。十九世紀初頭に西欧

の研究者・探検家によって発見・発掘された。ナイル川のアスワンハイダム建設で水没の危機にさらされたが、ユネスコによる国際的な救済活動により、一九六八年までの四年間をかけて、岩を分割して運び、約六〇メートル上方の現在地に移築された⁽⁴⁾。それは岩を削り抜くのではなく、コンクリート製のドームに復元するという大規模なものであった。世界遺産に登録され、その象徴的な遺跡とされている。

移築されたとはいえ、湖に面して並ぶ大小両神殿は圧巻であった。大神殿には、正面に四体の高さ二〇メートルのラムセス二世坐像が並び、大列柱室内部にも高さ一〇メートルの立像と自らの事跡を彫り込んだレリーフ、前室には神々に捧物をするラムセス二世、至聖所にもラー・ホルアクティ神、アラン・ラー神、プタハ神と共にラムセス二世像がまつられている。大列柱室内には、史上最古の講和条約とされるヒッタイトとの協定内容を刻んだ岩もある。小神殿の正面には、高さ一〇メートルのラムセス二世立像四体と王妃ネフェルトアリ立像二体があり、規模こそ小さいが、内部の荘厳さも大神殿に引けをとらない。さすがに世界遺産の象徴である。

ただ、圧倒されたのは遺跡の迫力だけではない。観光客の多さである。私のように空港から神殿へ来る者のためのバスが五台。神殿の駐車場に着いてみると、観光バスや貸切のマイクロバスが数十台も停まっていた。また、遺跡の前の湖には大型のクルーズ船が数隻停泊していた。私が遺跡に着いた七時過ぎには、数百人の観光客がいたのである。彼らのほとんどは団体旅行者で、神殿の外で付添の旅行ガイドから案内を受け、両神殿の内部を自由見学の後、バスまたは船に戻る。遺跡の外の土産物屋は、特に変わった品を置いているわけではないから、買い物をする人が少ない。何千人・何万人という人が訪れても、神殿への入場料（および

トイレに入る時のチップ）以外に地元へ落とされるお金は限られている。私も、アブシンベルで使ったお金は、入場料の九〇エジプトポンド（以下、ポンドと省略）だけだった。神殿で働く人は少なくないが、チケット売場と荷物検査などの警備、そして禁止されている神殿内部の撮影を監視する職員（？）ぐらいで、世界遺産の魅力を伝えるような文化と直結した人に会えなかったのは、とても残念だった⁽⁵⁾。

当初、アブシンベル神殿に二時間半ぐらい滞る予定であったが、ゆっくり見学しても一時間ぐらいで十分であり、それ以降は徐々に感動が覚めて来た。観光客の多さに加え、そのまま移築したとはいえ遺跡そのものに人の手が加わっているためであろうか、大きな博物館にいるような気持ちになったからである。確かに壮大ではあるが、大英博物館で見慣れたエジプト遺物の秀品と比較すると、少し作りが荒いようにも感じられた。世情も気になったので、予定を早めて空港へ戻ることにした。空港で何とか一時間早い九時四十分発の飛行機に変更でき⁽⁶⁾、十時十五分にアスワンに到着した。

四 アスワンのヌビア人タクシー

アスワン空港から市内への公共交通機関はなく、タクシーを利用する。ここでも団体旅行者がほとんどで、個人旅行者で市内に行くのは私一人であった。外で待機していた運転手と料金交渉することになる。大体二四ポンドと旅行案内などに書いてあるのだが、最初に言われたのは一五〇ポンド。これを五〇ポンドにして合意した。

とてもタクシーとは思えないヤンキー的な装飾。でも、これで行くしかない。途中寄り道して観光案内をさせようと交渉するが、これがまた



切りかけのオベリスク



アスワンのスーク

一筋縄ではいかない。彼は「ウェルカム トゥ アスワン」を発し、自分は（エジプト人からこの地にいる肌の黒い）ヌビア人で、善良であることを強調する。ところが、料金の話になると頑として譲らない。結局、さらに四〇ポンドを足して、市内の数ヶ所をまわってもらうことになった。

その後も、少し市内から離れたところは、ダウンタウンではないといって拒否するし、行く先々で自分の知り合いのヌビア人の所に行き、高額を支払わせようとする。例えば、フルーカという小さな帆船でナイル川を行き来する観光があるが、彼が善良だと言ったヌビア人は一時間七五ポンドといった。後でホテルの旅行会社から言われたのが一時間四〇ポンド、歩いている時に声をかけられたのでは二〇ポンドだったから、

どれだけふっかけられたかわからない。また、一緒に食事をとって紹介されたサンドイッチ屋では、ほとんど肉のないチキンサンドが二つで二〇ポンド。これには彼も私がだまされたことを認めた。こんな感じである。

それでも、ヌビア博物館やオベリスクの採掘場（共に入場料五〇ポンド）、ファアティマ朝期からのムスリム墓地、キリスト教会などを回ることができた。特にヌビア博物館（今回の旅行で訪問することができた唯一の博物館）は、エジプトとヌビア双方の視点から工夫された展示がなされ、時代考証やエジプトの要塞、村落に関するパネル展示もしっかりしていて見応えがあった。オベリスクの採掘場には切りかけのものがあ、その制作方法が手に取るようにわかった。ただ、冬の旅行シーズンとはいえ目の気温は三十度を越え、前日からほとんど睡眠をとっていなかったで、急ぎ足になってしまったことが心残りである。

最後に、アスワン駅前のスーク（商店街）を散策させてもらった。そこで、小さな数十人ぐらゐのデモを見たが、平和的であつたので、特に気に留めず、水や果物を仕入れて、ホテルへ向かってもらった。

五 イシス・アイランド・ホテル

私が予約をしていたイシス・アイランド・ホテルは、名の通りナイル川の中州の島にあり、対岸から専用送迎ボートで行くという贅沢さ。それがインターネットのサイトで二泊一四四ドル（税金が入って一七九ドル）という日本のビジネスホテル並みの値段で予約できた。島全体がホテルだから、安全この上ないところで、休暇を楽しむ西欧の旅行者であふれていた。



ライトアップされたフィエラのイシス神殿

ホテルにチェックインしたのは二時半頃。CNNやBBCなどの国際放送が見られたので、これでエジプト情勢を確認すると、デモは継続されているものの、軍は一切の軍事行動を停止し、平和的に見守っているという。この報道は私を安心させた。また、カイロ・アレキサンドリア・スエズに夜間（午後四時から午前八時まで）の外出禁止令（curfew）⁽⁷⁾が出されたという報道もあったが、ここアスワン、そして次の訪問地ルクソールは含まれていなかった。

当面危害は及ばないだろうと考えた。

ところが、インターネットが繋がらない。出発直前に送った校正の件で出版社との連絡にも必要だったが、それ以上に、持参したモバイルパソコンによるネット接続が日本語で情報集取する唯一の手段であっただけに、大きな不安材料であった。ホテルの人たちは「明日になれば繋がる」と言っていたので、最初は地方ホテルに良くある通信トラブル程度にとらえていたが、実際には国によってエジプト全土のインターネットが遮断されていたのである。この事実を知ったのは、この日の深夜、繰り返し放送される英語ニュースを聞いていた時であった。

三時半に入浴を済ませ、今日はもう寝てしまおうかと考えていた時、部屋の電話が鳴った。もしや、日本の家か大学からかと思ひ、急いで出

てみると、何のことはない、ホテルに入っている旅行社（タクシー手配）の人からであった。少し話すと、ルクソールまでの手配をすると言うので、十分後に相談に行くことにした。

このホテルも団体旅行者であふれていたから、私のような個人旅行者は数少ない鴨だったのだらう。私のことは、ホテルのフロントが教えたに違いない。個人情報や部屋番号を教えるなど通常考えられないことだが、これもエジプトの後進性なのだらう。彼の名はヤス。色々なツアーを熱心に勧めた。結局、三十日（日）のルクソールへの移動は専用車を使うことにし、途中、アスワンハイダム、コムオンボ神殿、エドフのホルス神殿、エスナのクヌム神殿に寄り、市内のホテルまで送るという約束で、六〇ポンド⁽⁸⁾。さらにアスワン近郊のフィエラ島にあるイシス神殿で夜に行なわれる音と光のショーを盛んに勧める。貸切のタクシーとボートで往復して一五〇ポンドだという。フィエラ島はオシリス神の島で、ここでイシス神がホルス神を生んだとされ、巡礼地でもあった⁽⁹⁾。少し贅沢かとも思ったが、アスワンにいううちに往っておくべき場所であったので、安全に送迎すると約束させて、その日の六時半からのショーに行くことにし、一時間後に対岸の船乗場でタクシーを待たせるとした。ヤスは、とにかく支払いをすぐにさせようとする。結局、合計金額七五〇ポンドをクレジットカードで払うことにしたが、そのカードの控え以外に領収書も契約書もなかった⁽¹⁰⁾。手続きは口頭のみで、私の名前さえ聞かなかったのだ⁽¹¹⁾。それでもホテルにディスクを置いてある旅行社（個人？）で信用はおけるのだらう、タクシーは時間通りに来ていた。

ちょうど日が暮れて夜のドライブとなる。彼もヌビア人。途中、宝石などを扱うヌビア商店の並ぶ道を通った。この地は古代からエジプトと南のスーダンなどとの交易の拠点でもあったから、ヌビア人にも裕福な

商人が多いのだろう。さらに夜の道を走り、検問を抜けると、港に着いた。ここで切符を買って神殿の島へ行くボートに乗るといふ。切符売場には西欧の観光客で列ができていた。当然、切符は手配されているだろうと思っていれば、ドライバーは私に並んで買えと言ふ。代金は含まれているはずだと、ヤスに電話をさせ、数分の問答の末に、入場料七五ポンドはヤスが払うことで決着した。⁽¹²⁾ チケットを入手し、ドライバーが手配したボートに乗って島に向かった。夜のナイル川にボートを走らせるのは爽快であった。島の港に着くと、天上には満天の星空。そして、ライトアップされた神殿に浮かび上がるレリーフ。多くの旅行者を魅了する理由がわかった。ショーは、祭神であるホルスの誕生から神殿の建築による栄光、さらに忘れられていた信仰が神殿移転により復活するといふ内容であったが、良かったのは、座席に坐って見ているだけではなく、(最初はロープの前に立っている) 見学者をイシス神殿の前庭から至聖所、そしてハトホル神殿の前などに誘導していくこと。至聖所内部もライトアップされていたことには、驚きに近い感動を覚えた。⁽¹³⁾ これができるのは、エジプトの神殿が過去の遺物であり、現在の信仰対象になっていないからであるのだけでも。

ショーの最後には睡魔との戦いになったが、最後まで鑑賞し、終了と同時に港のボートへ。対岸で待っているはずのタクシーが見えず、少し心配になったが、友人らしき人物に電話で呼び出してもらい、迎えに来させた。そんな怠慢な運転手ではあったが、少しはチップをあげなければと思い、ポケットを探ると適当な小額紙幣がない。そこで、持っていた小銭(二ポンドと少し)を渡したが、彼は「二ポンドだけをもらえるか」と言っただけで受け取らなかった。実は、これがエジプト(アラブ諸国)旅行の面倒なところで、普通のチップとは違うバクシシ(喜捨)の精

神に拠るといふ。金持ちが貧乏人にお金を払うのは当然だといふ発想である。さらにやっかいなのが、もらう方にもプライドがあること。この独特の「相場」を認識するのは大変だと教えられてはいたが、普段チップを渡す習慣がない日本人にはほとんど理解できない世界である。しかし、異文化理解だと思つて、その折り合いを探らなければならないのだろう。

六 二十九日(土) エレファンティネ島と アスワンのナイル側西岸

カイロの情勢が気になって深夜までテレビを見ていたが、ベッドに入るとすぐに熟睡。翌朝七時に快適な目覚めが待っていた。ニュースは昨夜と同じで、軍が武力行使を止めて平和的になったことを繰り返し伝えていた。そうなれば、朝食を済ませてすぐに遺跡へと出かける。

ホテルから専用ボートで東岸へ行き、別の乗場からホテルとは別の中州のエレファンティネ島へ行くこととしたのだが、そのボート乗場へのわずか一〇〇メートルほどの移動中に、数十人のフルーカの客引きに遭う中には子供もいて、それを大人の客引きが追い払おうと怒鳴っている。これだけで、もうホテルの部屋に戻りたくなった。何とか善良な人(最初は疑っていたが)によって乗場に着き、ボートが来るのを待っていたが、チケットもなく、誰もお金を払おうとしない。私はホテルで一ポンドと言われていたので、ボートに乗る直前に、大きな白い箱(お金を入れる穴が空いていた)に一ポンドコインを入れようと、前にいた子供に「これで良いか」と確認した。ところが、彼は「二ポンド」という。帰りは西岸の乗場から別の東岸の乗場へ行くボートに乗ったが、その時は「五ポンド」と言われたけれど、ほとんどの人が挨拶をするだけで、お



エレファンティネ島のクヌム神殿

金を払わずにボートに乗り込んでいた。ここでも、バクシーシに近い金持ちが払えばよいという思想が働いているのだろうか。

エレファンティネ島の南側（ナイル川の上流の方）には、エジプト古王朝期の住居跡や様々な時期に建立された神殿が複数遺されている。そこから発掘された遺物を展示する博物館は閉鎖中であつたが、遺跡の見学は自由にできた。

住居跡などは未だに発掘中であつたし、神殿も（恐らく復元して博物館にある彫刻などを安置しよう

としているのだろう）修理中のものが多かったが、団体旅行者が他の場所以外に少なく（日本人観光客には会わなかった）、何千年という歴史に想いを馳せることができた。最大のクヌム神殿はローマ時代のもので、同じエジプト的なスタイルが維持・拡大されていること、新旧二つのナイルメーターが神殿と一体になって存在していることなどを確認できた。十分に時間をかけて遺跡を見学した後、島内のヌビア村を通り抜けて、ナイル側西岸に渡るボートを探した。ちょうど団体西欧人旅行者を乗せた小型観光船が来たので、料金交渉をし、最初四〇ポンドといわれたのを二〇ポンドにして乗った。ここでも、別の場所に停泊しているフルーカへ案内しようとする子供たちが来て、それを小型観光船の大人が叩きながら追い返すという光景が見られた。



聖シメオン修道院

西岸に着くと、そこには駱駝乗りが待っている。すぐ上の岡にあるアガハーン廟は行くことができないと言われ、五〇〇メートルほど離れたところにある聖メシオン修道院跡とさらに一キロほど北にある岩窟墳墓群（貴族の墓）を目指す。いつもならば歩くところだが、炎天下に砂漠を歩くのは少し危険かとも思い、駱駝乗りの親方と交渉を始めた。ホテルで四〇ポンドと言われていたので、それ以下になったら乗ろうと決めて最終的に三五ポンドで契約した。初めての経験だったが、駱駝は人に乗せようとすると悲鳴のような泣き方をする。頭にはハエがいっぱい止まっていた、哀愁を帯びたような丸い目を見ると少しかわいそうな気がした。駱駝は二人乗りで、客が一人の場合は駱駝つかいも一緒に乗る。駱駝つかいの名は、アブーラ、三十五歳。途中、二十二歳の新妻に携帯で電話をして、私とも話をさせる。

また、これでムバラクも終わりだとも語っていたが、彼の英語が聞きづらかったこともあり、深入りしなかった。修道院までは十分もかからない距離だったが、彼の後ろに乗りながら、砂の上を歩いてこの坂を登ったら大変だったと思った。

聖メシオン修道院（入場料一五ポンド）は、もと四世紀の聖者の名を取って聖ハトレ（またはドビラ）修道院といわれた。増改築が繰り返されたが、十三世紀に廃墟



岩窟墳墓内部

になった。丘の岩の上に建ち、煉瓦で作られた教会堂（部分的に壁画も）や僧房・食糧倉庫などが予想以上に良く遺っていた。特に最上階にある僧坊は、ベッドの位置などもわかり、砂漠の中とは思えないほど涼しくて居心地が良かった。かつてはここで多くの修道士が学業と瞑想の生活を送っていたのだろう。私も瞑想（昼寝？）をしたいところだったが、一刻も早く新妻の元に戻りたいアブーラが先を急がせる。

さらに十分ぐらゐ駱駝のこぶの上でゆられて（途中はかなり速く走る）、前方に再び雄大なナイル川を望むと、岩窟墳墓群はすぐだという。左（北）に見える集落がヌビア村で、アブーラは「俺の家に来てお茶でも」と誘うが、追加料金を払わされるのは目に見えていたので丁重に断わった。丘の中腹にある墳墓群の入口に着いた時、アブーラは私に下に

あるチケット売場へ歩いて行って買ってこいと言う。駱駝があるにもかかわらずである。問答の末、携帯電話で連絡を取らせるところ、しばらくして十歳ぐらいの子供がチケットを持って登ってきた。先ずチケット代の三〇ポンド（学生券ではなかった）を彼に渡す。すると、最初の契約では墳墓群を見て船乗場までという約束だったのに、アブーラはもう帰ると言ってお金を要求した。船着き場はすぐ下だから自分で降りろというのである。問答の末、バクシーシを含

めた四〇ポンドとポケットの中に入っていた飴をあげると、喜んで村の方へ帰って行った。恐らく彼にとってこの四〇ポンドは一日の収入として十分で、もっと稼ぐより妻との時間を大切にしたいのだったのだろう。

岩を割り抜いて作られた墳墓は、ローマ時代の貴族のもの。チケットを下から持ってきた子供が、別の管理人から鍵を受け取り、三つの主要な墳墓を私を案内した。全体としてはかなりの数があり、キリスト教のものもあったが、その中に入れなかった。ローマ時代のものとはいえ、やはりエジプトのファラオ的デザインで統一されていた。これまでも大英博物館や南イタリアなどで、ローマ時代のエジプト的な棺桶などの葬送遺物を見てきたが、それを墳墓でも確認できたことの意義は大きかった。

そして、子供へのバクシーシ。最初五ポンドを渡したが、彼は下からチケットを届けたことを強調して少ないという。さらに五ポンドを渡しても不満は消えない。自分がヌビア人で、昨日のサッカーの試合で日本を応援したことを繰り返して強調し、さらなるお金を要求した。⁽¹⁶⁾ 駱駝つかいにバクシーシを十ポンドも払っていないことを告げ、しぶしぶ了承したようだが、子供が働き、大人以上のバクシーシを要求する姿には当惑した。彼は遺跡の価値を全く理解せず（もちろん遺跡の解説などはできなかった）、そこを訪れる客からお金を取ることにしか考えないのだ。改めて、教育のあり方などを考えさせられた。

その後、ボートで東岸に戻り、ナイル川沿いを散策し、ホテル専用ボートに乗ってホテルへ戻った。三時半頃だったと思う。土曜日ということもあり、ナイル川沿いのメイン道路は平穏そのもの。大きな買い物をしてタクシーを止めるエジプト人の姿も多数目撃した。前日に停泊していたクルーザーホテルはすでになく、観光客を乗せてルクソールへ向

かったのだと判断できた。

ホテルでニュースを見ると、デモは平穏だが継続され、その間にムバラク大統領が三十年の統治で初めて副大統領を選出したという。相変わらずインターネットは繋がらない。心配ばかりしていても良くないと考え、三十分ほど敷地内のプールで泳いだ後、明日の移動距離が長いことを考慮して、早めの夕食をとった。その前後に、旅行社のヤスと会って明日の旅程とルクソールの安全を確認し、さらに団体旅行を運営している会社幹部と思われる人たちに情勢について話を聞いた。彼らは一様にデモは収まると言い、副大統領となったオマル・スレイマンのことを尋ねると、これで大丈夫だと答える。さらにムバラク大統領は退陣するだろうかと思ねると、彼らは「ムバラクが悪いんじゃない、彼の取り巻きに悪いやつがいるんだ。それが問題だ」と言う。私は「お前らもその取り巻きの外縁にいるんじゃないか」と心の中で叫びながら、しばらくにこやかに雑談をして、部屋へ戻った。

エジプトは、ほとんど観光を中心として経済が成り立っている国である。彼ら観光業者は、ムバラク大統領の専制政治によって安定していたからこそ、私腹を肥やすことができた。もちろんその中で最も私腹を肥やしたのが、ムバラク大統領本人である。彼の関連企業の蓄財は、七〇億ドルにもなるという。カイロのタハリール広場で民主化を訴えて集まっている人々と、上層階級の間に、これほどの差がある。そして、この上層階級に守られているが故に、ムバラク大統領は辞任しないということとを、はっきり認識できた。今はムバラク個人に向けられている反政府デモも、本来は社会構造そのものに向けられなければならないのだろう。そんなことを考えながら、CNNとBBCのニュースを交互に見ていたが、同じことが繰り返されるばかりで意味がない。明日の長距離移動

を考えて早く寝ようと床に着き、うとうとし始めた時、電話が鳴った。時間を見ると十時過ぎ。日本時間の午前四時だから、日本からではないだろうと思いつきながら受話器を取ると、またヤスからであった。

明日の車にもう一人加わるという。私がやった車だからダメだと言っても、また、二人になったから半額は返金されるべきだと言っても、彼は頑として応じない。却って「その人は学生だから、遺跡などを見るのに君が助けて上げられる」などと言ってくる。自分の旅程に変更がないなら仕方ないと思い、明日の朝八時十五分にホテルからボートに乗るという時間確認をして受話器を置いた。また眠れなくなり、テレビをつけ、二時過ぎまで悶々としていた。

七 三十日(日) アスワンからルクソールへ 最後の「観光」

眠ったのは三時間ぐらいだろうか、五時過ぎには完全に目が覚めてしまった。テレビ報道は依然として変わらない。インターネットも繋がらない。少しずつ明るくなる空を見ながら、朝食が始まる時間を待つ。七時ちょうどに食堂へ行き、何があっても良いようにしっかりと朝食をとり、さらにパンとゆで卵をナプキンに包んで持ち帰った。

八時にフロントでチェックアウトをすると、近くに一人の金髪青年がいる。以心伝心、お互いすぐに同乗者だとわかり、自己紹介をしながらボートに乗り、車の待つ対岸へ。運転手と車は一昨日と同じだが、今回は長距離移動の退屈をしのぐためだろうか、友人として青年が助手席に乗っていた。冷房の効く「三菱」の乗用車が、日本人の私には快適さと安心を約束しているように思えた。それ以上に、この時点では全く予想できなかったが、彼との出会いが私のエジプト脱出への助走になったの

である。

彼の名はダニエル。スイス人で移民局（入国管理官）に勤めているという。スイスは四つも公用語があり（ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマネスク語）、ただでもスイス人は語学に堪能なのだが、ダニエルは移民を受け入れる仕事をしているということで、さらにロシア・東ヨーロッパ・アフリカの言語を操れた。アラビア語はダメだと言いながらも、エジプトは初めてではなく、辞書を見ながら運転手と会話していたのだから、大したものである。最初、私はヤスから学生と聞いていたことを伝えと、つい最近まで学生で、その身分証があるから、遺跡などは学生料金では入れるということだった。他方ダニエルは、ヤスから私のことを韓国人と聞いていたそうで、日本人で英語が話せる私と会って安心したと語ってくれた。

ダニエルは最初から少しナーヴァス（神経質）になっていた。その理由の一つは、彼がスイス人であること。スイスは永世中立国として他国からの侵略を受けないように神経をとがらせており、それが国民性にも反映されている。私はこれからの旅で、その危機管理を実践する姿を見せつけられることになる。もう一つは、彼がエジプトでデモと軍隊との衝突を目撃していたことである。テレビのニュースがカイロ・アレクサンドリア・スエズの三都市の情報しか伝えていなかったの、彼の体験談は衝撃的であった。三日前（二十七日）に、私たちがこれから向かうルクソールでバスに乗っていたら、軍隊がバス周辺にいた群衆に向けて催涙ガス弾を発砲する場面に出会った。催涙ガス弾は自分たちに向けて打たれたので怖かったし、催涙ガスの名の通り涙が止まなくなり、喻えようのない不快感を味わった。そして、より安全と考えられたアスワンに來たが、そこでもデモと軍隊の衝突があり、同じように催涙ガスを浴

びた。最初、アスワン市内のホテルにいたが、怖くなって昨日（二十九日）、安全と思われるイシス・アイランド・ホテルに移り、そこで私の車に同乗することを決めたという。⁽¹⁷⁾ダニエルは、アスワン市内のホテルには多くのアジア人がいて、夜にも平気で市内に外出していくのが信じられなかったと、興奮しながら語ってくれた。あるいは、テレビで報道されていた外出禁止令（curfew）の意味が理解されていなかったのかも知れない。

私が、これからルクソールで四泊し、紅海沿岸（シナイ半島のアカバ湾）のリゾート地シャルムイッシェーフへ飛んでダバブで三泊、それからアレクサンドリアに飛んでそこで三泊、さらにカイロへ移動して五泊してロンドンに帰ることを伝えと、ダニエルは、ルクソールでの注意点、アレクサンドリアからカイロへの鉄道のことなどを親切に教えてくれた。しかし、彼の予定を聞くと、今日のうちにハルガダに行き、そこからスイスのジュネーブに行く水曜日（二月二日）のフライトを予約してあるという。それも、もっと長く滞在する予定を早めて、急遽、スイスの旅行会社の友人に頼んで変更してもらったとのことであった。

ダニエルが向かおうとしているハルガダ（Hurghada）は、私のルートに入っていないかったために事前の知識がなかった上、英語の発音では「ウルガーダ」となるので、話していてなかなか要領が得られなかった。ハルガダは紅海（スエズ湾）に面したアフリカ大陸（ナイル川）側のリゾート地で、その空港には多くの国際線が入っている。また、対岸のシナイ半島（東）側にはシャルムイッシェーフがあり、スピードボート（高速船）で行くことができる。ルクソールから約三〇〇キロのところ（高速船）にあり（アスワンからルクソールまでは約二〇〇キロ）、その日の内に着くことも可能である。この時点で、私の選択肢の中にハルガダ行きが



アスワンハイダムから臨むナセル湖

インプット（入力）された。しかし、彼がすでにこの車で行く契約をしているとは知らなかったのも、バスか何かを利用することになり、かなり大変だと思い、積極的には考えなかった。

とにかく車に乗り、予定通り見学地を回る。最初はアスワン市の南一二キロにあるアスワンハイダム（入場料二〇ポンド）。ルクソール（北）へのルートからは外れるが、アスワン初日のヌビア人タクシーが行かなかったのも、あえて入れてもらった。一九七〇年に

ドイツとソ連の協力によって完成した幅三六〇〇メートル・高さ一一一メートルの巨大なダムで、現代エジプトの記念碑的な存在である。ここから上流（南）に全長五〇〇キロに及ぶ巨大な人造のナセル湖ができたことにより、多くの神殿が移築・水没したことは前に記した。ダム入口近くにもヌビア神に捧げられたカラブシャ神殿が臨まれた。この巨大な湖を見ながら、二日前に行ったアブシンベル神殿などを思い出した。撮影禁止と聞いていたが、我々より前にいた団体旅行者も、次々乗り付けてきた人々も、かまわずシャッターを切り、警備員も注意しなかった。私もダニエルもシャッターを切った。ここは至って平和で平常そのものであった。

再びアスワン市内を抜けて、ナイル川沿いを四六キロ北上した東岸に

あるコムオンボ（アラビア語でオリンボスの丘という意味）へ向かう。町の中心でガイドを乗せて、四キロほど離れた神殿へ（入場料一五ポンド）。プトレマイオス朝に建てられ、ローマの初代皇帝アウグストゥスの時代に完成したというだけあって、壮大かつ洗練されていた。アブシンベル神殿が、新王朝の最盛期ラムセス二世の権威を誇示した威厳に満ちた壮大さであるのに対し、コムオンボ神殿は、ヘレニズム・ローマの壮大さがエジプト的に改変された姿といえるだろう。工法も岩盤を削り抜くのではなく、加工した岩を積み重ねる建築であり、技術的にも異質である。ところが、内部のレリーフは全くエジプト的で、神々に捧物をする王の姿やヒエログリフなどであふれていた。この神殿の特色は、一つの建物の中にホルス神とソベク神（ワニの神）をまつる二つの至聖所があり、それ故に入口や列柱室も南北二つに分かれていることである。その列柱室は、各王の代ごとに造築されていったから、入口からは時代を遡るようにレリーフの変化を見ていくことになる。また、ソベク神の至聖所の近くにはカレンダーがあって三六〇日プラス五日の独特な表示方法がなされていること、至聖所の後（北側）には北ナイルで唯一の病院（癒し所）があったこと、至聖所では神官が正面で待つ個人参詣者の祈願に関する神託を得ていたこと、建物の外のナイル川を望む場所に円形の井戸のようなナイルメーターがあってナイル川の水量によってその年の税金が決まったことなどをガイドから聞いた。古代エジプトの神殿は単なる神をまつる場所ではなく、暦、一年の収穫・税金という人民支配と一体化していたことがよくわかった。神託を利用した精神療法を行なう病院はベルガマ（トルコ）のアスクレピオン、参詣者を表に待たせて神官が内陣で神託を受ける方法はティディム（トルコ）のアポロン神殿とそれぞれ近似しており、古代ギリシャの神観念が導入されたと考



コムオンボ神殿の暦



コムオンボ神殿のナイロメーター



エドフのホルス神殿第二塔門



エドフのホルス神殿至聖所の聖船

えられる。さらに遺跡の特色を分析したいと思ったが、ガイドは一通りの説明をして終わりだという。また、撮影などの自由時間も、早く帰りたいガイドと先を急ぐダニエルとによって制限されてしまった。二対一ではしかなかった。¹⁸⁾

また車を走らせて、さらに六〇キロ下流（北）のエドフへ。ローマ時代にはアポリノポリス・マグナと呼ばれる上エジプトの州都であった。また町でガイドを乗せて、西岸にあるホルス神殿へ行く（入場料二五ポンド）。これもローマ時代の壮大な神殿で、エジプト内で最も保存状態が良いといわれる。異色なのは、第二塔門と呼ばれる神殿と一体になった入口の巨大な建造物。外側は城壁のように重厚な石面にホルスの神話を表す巨大なレリーフが描かれているが、内側には中庭が広がり、初

層にギリシャ風の柱を用いた優雅な空間を作り出している。第二塔門の外と中庭の第一列柱室入口にある石像のホルス神（隼）は、人の背丈以上ある。内部も頑丈な要塞のような作りになっており、二つの列柱室と二つの前室を経て、やっと至聖所へ到る。至聖所もかなり大きく、中にはレバノン杉で作られた聖船が安置されていた。¹⁹⁾大英博物館の死者の書の特別展示でも強調されていたように、船は死と再生の象徴である。当然、その祈りがなされていたのであろう。至聖所の周りにはいくつもの部屋があり、そのすべてがエジプトのレリーフで覆いつくされていた。ただし、この神殿がキリスト教の教会として使われていた頃に神像は削られ、食堂として使われた部屋の天井は煤で黒くなっていた。また、この神殿では、ナイロメーターが建物の周壁にあり、設計時のプランに組

み込まれていた可能性を窺わせる。塔門の前に誕生殿があり、その裏（神殿の西）には古代の町やネクロポリスがあって発掘途中であったが、これらも先を急いだためにほとんど見ることができなかった。

八 ルクソール空港 日本とスイスの危機管理の違い

エドフはアスワンとルクソールの中間に位置した。この見学を終えた時点で、残すはエスナのクヌム神殿のみとなった。すでに十二時になるうとしていたが、それでも十分明るいうちにルクソールに着くと予想され、今日中にルクソール市内の神殿か葬祭殿を一つか二つ回れるのではと思った。ところが、車に戻ったその時、ダニエルがたまにかねたという表情で観光の中止を申し出てきた。あのデモと軍隊の衝突を見たルクソールに近づくに従って、彼の表情がより険しくなったのがわかった。

エドフに着く前から、私たちはエジプト情勢や遺跡・道路の状況について分析し、意見を交わしてきた。最初は自分たちが見聞いたことやニュース報道について検討し、私が現在の情勢は平穏なデモで軍隊も静観するようになったと言うと、彼はルクソールやアスワンで受けた恐怖を語り、もはやデモではなく暴動（looting）に変化していると主張した。

また、遺跡を案内したガイドにも最新情報を教えてもらった。彼らは、カイロやアレクサンドリアは混乱しているけれども、この辺は安全そのものだという。私も車窓を注視していたが、道路や町に何の混乱もなく、駱駝を乗せてルクソール方面に向かう小型トラックを数台目撃したし、路上の屋台の数も多かった。並行して走る列車は乗客を乗せ、平常そのものだった。特に対向車の分析は重要で、もしもルクソール市内で不穏な事態が起こったとしたら、荷物を積んで逃げ出す車が来るだろうと考

えたが、それは一切認められなかった。

しかし、ダニエルの分析は違った。二日前に同じ道を通っていたこともあり、道路や町の様子よりも、警備（警察）の人数を数えていたのだ。そして、ルクソールに近づくに従い、警備が少なくなり、検問が緩やかになっていくという。エジプトの幹線道路には、数一〇キロおきに車を止める検問所がある。特にナイル川中流域は、部族や宗教の問題でテロが発生するため、検問が厳重で、旅行者も自由に行き来できず、必ずと言ってよいほどチェックを受けるはずなのである。それなのに、アスワンから離れるとほとんどチェックがなかった。さらにルクソールに近づく、警備の姿を見ない検問所もあった。これは二日前と明らかに違い、市民の襲撃を恐れて警備（警察）が逃げている可能性があると言う。

ダニエルは、この車でルクソール市内に入ることすら拒否したいと言う。私は、市内でバスに乗り換えるのかと思っていたら、ダニエルはこの車でハルガダへ行くことを契約し、何と一二〇〇ポンドもヤスに払っていたのだ。アスワンの旅行社のヤスは、ダニエルの焦りに付け込んで高額を払わせていたのだ。それだけではない。ダニエルはヤスと契約した際に、ルクソールで見たデモと軍隊の衝突について（私に）話すことを約束させたのだが、ヤスは私に電話したにもかかわらず、そのことは一切伝えなかった。⁽²⁰⁾ ダニエルと私は、やっとお互いの立場を正確に理解するに至ったと同時に、お金を儲けることしか考えないヤスに対する怒りを共有したのである。

ダニエルは携帯を使って外部と通信していた。インターネットは使えなくても、携帯電話のテキストメールは送受信できたのである。職場の関係者、スイスの旅行社に勤める友人、今エジプトで旅行しているスイス人、そしてスイス大使館。ダニエルは絶えず自分の行動や考えを送り、

最新の情報を得ていた。そして、テレビがカイロの様子を伝えなくなったという衝撃的なニュースが飛び込むと、ダニエルはすぐにスイス大使館へ電話をかけた。スイス大使館では、エジプトに旅行しているスイス人に連絡を取らせ、その名前を記録し、必要な時にメッセージを送っていたのである。そして、そのスイス大使館や他の複数の筋から、ハルガダが海軍の支配下になり、全く安全だという情報を得られた。

ダニエルがナーヴァスになっていた分、私は逆に落ち着いていられ、あらゆる可能性を想定しながら自らのとるべき行動を考えることができた。ただ、朝出発してから私たちは車の中から限られた場所を覗くだけで、四時間以上テレビも見えていない。少しでも客観的な情報を得ようと、私も日本大使館へ電話することにした。三度目に繋がり、現地スタッフと思われる人が出た。ここで確実な情報を得なければと、自分の身分と名前を伝えて日本語で話せるかと言うと、少し待てと言って日本人職員と替わってくれた。この職員は私の名前を聞き返さなかったので、記録などは取っていなかったと思われる。恐らく日本人旅行者はスイス人とは比較にならないくらい多くいたであろうから、一人一人を把握するのは無理だと思いがちだが、スイスと日本の危機管理の差を感じずにはいられなかった。

大使館職員に、自分が今ルクソールへ向かう途中であることを告げ、ルクソール滞在を含めた予定の行動について可否を尋ねたところ、できればルクソール空港へ行き、そこから国外へ脱出するのが一番だと言う。私のロンドン行きのチケットがカイロ空港からだと言えらる、カイロ空港に直接飛行機で行けるのであれば良いが、カイロ市内は立ち寄らない方が良くと教えてくれた。ルクソールの治安について尋ねると、「ルクソールでも暴動があったようです」という程度の回答。さらに、今スイ

ス人とい彼とこの車でハルガダに行くこともできるがどう思ふかと聞くと、紅海沿岸のことはわからないと言う。大使館から得られる情報は得たと考え、礼を言って電話を切った。

淡々と話す大使館職員ではあったが、できればルクソール空港から出る海外の便を探せ、というアドバイスは大変有効であった。「エスナに行くのは止めて、とにかくルクソール空港へ行こう。そこで市内の状況なども知ることができはるはずだ。」私の提案にダニエルも合意し、運転手にその旨を伝えた。ところが、運転手はいちいちヤスに連絡し、指示を仰ぐのである。私も電話に出て、ヤスに事情を説明し、やっとルートの変更を運転手に伝えさせた。それでも危機意識を持たない運転手は半信半疑で、ルクソールでは市内に向かおうとする。ダニエルと私は、アラビア語で「マタール（空港）、マタール」と叫び続けた。

ルクソール空港に到着するや、異変を感じた。先ず、私たちの車を空港に入れないのである。アラビア語での会話を運転手が伝えたことなので、正確でないかも知れないが、今はフライトがないのである。それにしても、軍隊が厳重に空港を警備し、車で乗り付けた我々を駐車場にも入れないということは、市内が混乱しているためではないか。私たちはその可能性を考えた。

それでも、中で情報を得ることは不可欠と考えた私は、車を出てトラUNKを開けさせ、鞆の中にあつた二月三日（四日後）のEチケットの控えを出し、「私はルクソール空港からシャルムイッシーフ空港へ行くエジプト航空のチケットを持っており、その確認をし、できれば今日の便に変えたい」と懇願した。すると、私だけの入場を認めようとしたのだが、それでは了解できない。粘って交渉した結果、やっと車で入れることになった。そして、ダニエルと出発ターミナルに行き、ディパーチ

ヤー・ボード（出発予定表）を見ると、国内便がすべて欠航になっている。聞くと、カイロから飛行機が来ないという。これにより、カイロ空港が大混乱の最中であることを知る事ができた。そして、この日のうちにシャルムイッシェーフまたはカイロへ行くという選択肢はなくなった。それにしても、エジプト国内で一番頼りになるだろうと考えていたエジプト航空が混乱の極みにあったことは、とてもショックで、以後のエジプト滞在・移動に大きな不安を感じた。

ただ、ボードの一番上に「ウィーン」の文字が見え、出発が一時間後の二時四十分になっていた。これでウィーンに行つて音楽を聴くのも悪くない、という考えが頭を過ぎった。大使館職員にも国外行きを勧められていたので、今度は荷物検査をする職員を説伏せて、チェックインカウンターまで行くが、あっさり「満席」を告げられてしまった。そうだろう、多くの旅行者が国外へ出たいと考えている中で、一時間後のフライトに空きがあるはずはない。けれども、ここで私の意志は決まった。ダニエルと一緒にハルガダへ行こう、と。

九 ハルガダへの道 脱出劇の始まり

かくしてハルガダ行きを決め、再び車に乗ったのは、二時頃だったと思う。アスワンのホテルを出る前には、全く予想できなかった行動である。改めてガイドブックでハルガダについて調べてみると、西欧からダイビングなどでバカンスを楽しむために多くの旅行者が訪れるリゾート地で、国際線も多く発着していることが確認できた。また、飛行機の手配次第では、スピードボートでシャルムイッシェーフ行き、そこからのフライトを探す手段もある。シャルムイッシェーフからは、当初からの

訪問予定地であったダバブヘタクシーで一時間ほどだし、さらに北上してターバーからイスラエルへ入る方法があることも知っていた。⁽²⁾

ルクソールは中王国の第十二王朝に首都となったテーベで、新王国の第十八・十九王朝に繁栄の頂点を迎えた。それまで墓と葬祭殿・神殿が一体となったピラミッドコンプレックスであったものが、ここで岩窟墳墓と葬祭殿に分離するのであり、エジプト文明を遡っていくように組んだ私のプランの中で欠かすことのできない重要な訪問地であった。東岸にはルクソール神殿やカルナック神殿、西岸にはあのツタンカーメンも葬られていた王家の谷やハトシェプスト女王葬祭殿があり、エジプト観光の目玉である。カイロ近郊のピラミッドに加え、ここにも行けないのは断腸の思いだったが、ルクソールに行っても市内が混乱していたならば外出できないだろうし、何より安全に勝るものはない。とにかく、ルクソール空港が機能していないとわかった今、一刻も早くハルガダへ向かうのが最良の選択だったのである。

私も市内のホテルには行かずにハルガダへ行くことを告げたにもかかわらず、運転手が市内に向かおうとしていることにダニエルが気づいた。「なぜだ」と聞くと、市内へ入る五ポンドのチケットを返しに行くと言う。「そんなことぐらいで」と怒ったダニエルは、五ポンド紙幣を渡しながらか、「（ハルガダへ行く途中の町）エナ（Qena）の方へ行け」と叫ぶ。危機意識を共有しない運転手に、彼の興奮はなかなか静まらなかった。

車が市内へ行かず、安心したと思った時、運転手が私に携帯電話を渡した。電話の相手はヤス。ヤスは、ほんとうに私がハルガダへ行くことを確認した上で、それなら四〇〇ポンド払えと言う。しかも、今すぐに運転手へ。すでにダニエルが雇っている車である。ダニエルに払うのは

わかるが、ヤスに払うのは合点がいかない。また、彼の不誠実な対応を指摘して一度電話を切った。ダニエルに話すと、彼も払う必要はないと言う。二人でいることの心強さを感じて、再び交渉に臨む。ヤスは、旅行者の情報を警察に伝える必要もあるから個別料金になっているなどとも言う。そんなことをしているとは考えられなかったけれども、これから三〇〇キロ近くを走るのであるから多少の出費はしかたないと思い、結局半額の二〇〇ポンドで合意して、運転手に渡した。

契約した旅行者の安全を気遣うことは一切なく、逆に弱みに付け込むような遣り方で金をむしり取る。ダニエルと私は、言葉を極めてヤスを罵った。運転手がそれを理解していたかはわからない。私は、ヤスの不誠実は許せないけれども、彼の食欲さがダニエルとの出会いに繋がったことに感謝しなければ、とも感じていた。私たちの議論は、ヤスのことから、さらにエジプト文化についてと発展し、尽きることがなかった。

これは国の貧しさだけの問題ではない。ダニエルも指摘したように、貧しくて成実な旅行者をもてなす国は世界中にいっぱいある。また、これがバクシシー（喜捨）というイスラム・アラブ文化に由来するのかは、アラブの他の国に行ったことがない私には判断しかねるところであった。確実なことは、エジプト人のエジプト文化に対する認識の問題で、さらに突き詰めれば教育の問題だと思った。子供が働いている現実、何よりも教育の未熟さを物語っていたが、それだけではない。彼らはエジプト古代文明を見に押し寄せる観光客を相手に仕事をするが、その文明は遙か過去のもので、自分たちの祖先の文化と無関係なところで存在している。だから、祖先の偉業としての尊厳さを伝えようという精神性が欠如し、単なる物と同じように文化を扱う。しかもその文化は、西欧の価値観によって認識されるまで、地中に埋もれていたものである。その意

味で、エジプトの観光文化は、自ら耕作し収穫したものを売るという「農業」の段階に達していない。自分たちが何もしないで観光客は押し寄せるから、観光客の価値観に合わせる必要はなく、自分たちの遣り方を押し通せる。ルクソールやカイロに行っていれば違っていた認識をしたかも知れないが、今までのエジプト観光のあり方を見て、こう分析せざるを得なかった。このエジプトにおける「採取経済的観光文化」については、後でも触れることにしたい。

私たちは引き続き道路の状況分析にも注意を払い、検問所に警備（警察）がいれば運転手に異変はないかを尋ねさせた。無事、エナの検問所に至る。これもダニエルが数日前に通っており、その時はムバラク大統領の大きな写真が二〇〇メートルおきにあったという。しかし、今回確認できたのは二枚ぐらいで、明らかに破壊された跡とわかるものもあった。一見平穏に見えるこのエナでも、デモがあったのだらう。その後は砂漠の中の一本道をひたすら一二〇キロから一四〇キロぐらいを出して走り続ける。道路に異常はなく、長距離バスも走っていた。

四時頃、ドライブインに停まり、運転手が「まだ二〇〇キロもあるから食事をしてはどうか」と尋ねる。そういえば出発してから何も食べていなかった。私はダニエルが先を急ぎたいのではと言ったが、ダニエルも良いということになり、四人で食堂へ行く。ドライブインというより大きな小屋という方が日本人にイメージしやすいかも知れない。私は二十年前に旅した中国のドライブインを思い出した。奥のカウンターでフライドポテトと豆を注文と言う。ダニエルが通訳し、四人分の二〇ポンドは私が払った。テーブルはどこも掃除をした形跡がないほど汚れていた。ポテトと煮豆（レンズ豆？）がそれぞれ銀メッキの皿に一人分ずつ盛られ、それをテーブルに運んだ。これだけかと思ったら、定番の



エナからサファーガへ向かう途中の景色

アエーシという丸パン（インドのチャパティのようなもの）と山羊のチーズも来た。驚いたのはテールに置かれていた塩。灰皿のようなものに入っていたので最初はわからなかったが、不純物が多いため、茶色なのだ。それを運転手が私の豆の皿にかけてくれた時は、正直心配になった。でも塩は塩。空腹だったし、少し癖のあるチーズも慣れれば美味しく感じた。エジプト人たちは豆をつぶして塩をたっぷり入れて食べていた。考えてみると、今回のエジプト旅行でも貴重だった。また、食後にはエジプトのトイレも体験した。

さらに二時間ぐらい走っただろうか、赤茶けた山を越えた後で、目の前に海が見えた。「オー、レッドシー（紅海）」と心の底から声を上げた。私の予想よりも早く、日没前に紅海沿岸に着いたのである。ダニエルもここまで来れば絶対に安心だと胸を撫で下ろした。ここはサファーガ。目指すハルガダの六〇キロ南に位置する。近くで産出されるリン鉱石を輸出する港町であるが、最近はりゾート開発も盛んなようで、大規模工事が進められていた。海岸と並行する道はハイウエーのようで、そこからはコンビナートやレジャー施設、高層集合住宅などが見えた。エジプトの中でも紅海沿岸は最も西欧に近い場所と言われていたが、まさにそ

の通りであった。

しかし、安心したのも束の間、私はこれからの心配をしなければならなかった。何しろ全く予定外の行動に出してしまったのだから。ダニエルは水曜日（二月二日）にジュネーブへ行く飛行機のチケットを持っているが、私のチケットは確保できるのだろうか。チケット確保が難しい場合、ハルガダに残るべきか、はたまたイスラエル行きまで視野に入れてシャルムイッシェーフへ移動すべきか。ルクソール空港でカイロ空港の混乱を知ったが、この両空港も平常であるという保証はない。

やがて日も暮れ、私たちは宿泊場所やこれからの行動について相談した。ダニエルはハルガダの中心イッダハールと高級リゾートホテルが林立するコラ地区の中間に位置するスイガーラに行って宿を探すつもりだという。飛行場はコラ地区の方が近いが、適度に落ち着いていいだろうと言う。調べてみると、第二の選択肢に考えていたシャルムイッシェーフへ行くスピードボートが発着する港もこのスイガーラにあるので、私も同行することにし、一緒に宿を探すことになった。何より二人でいることの方が心強い。

スイガーラの中心と思われるシェラトン通り（実際は間違えていたが）で車を降りた。夜の七時を過ぎていたと思う。私は運転手に（二日前に彼が少額を受け取らなかったという実地授業を踏まえて）五〇ポンドをバクシーシとして渡した。今度は喜んで受け取ったのだが、ダニエルにも手を差し向ける。私が二人分だと言っても無駄で、ダニエルも渋々五〇ポンドを渡した。

町は賑やかで、街灯や商店の灯りで十分に照らされていたとはいえ、初めての土地での夜道は少し怖い。ダニエルがアラビア語でホテルのある方向を教えてもらう。五分も歩かないうちに一軒目のホテルがあり、

値段を聞き部屋を見せてもらう。八〇ポンドだったが、私がレセプションの対応も部屋も良くないと判断して、別のホテルを探す。二軒目は、メイン通りに面していないので不安が残るとダニエルが言い、三軒目へ。ここは九〇ポンドだったが、レセプションの対応も良かったので、私が三階、ダニエルが五階の部屋を取ることにした。⁽²²⁾ 荷ほどきをしてからまたロビーで会うことにして、それぞれ部屋へ行った。ホテルは国際電話を使えなかったが、イギリスの携帯電話で日本の家族にテキスト（ローマ字）メールを送り、全く安全であると伝えることができた。ただ、テレビが旧式でアラビア語の放送しか見られず、これは失敗したと思った。インターネットは通常ならロビーで接続できると言われたが、やはり（国によって切断され）使用できなかった。

再会後、先ず航空券の手配が可能かどうかを確認しなかったのが旅行社を探したいと言うと、早くビールを飲みたいと言っていたダニエルも付き合ってくれた。閉店した後であったが、隣で支配人らしき人がくつろいでいた。話を聞くと、インターネットが使えないので予約ができないから、コラ地区にあるエジプト航空の事務所へ行けと言う。八時を過ぎていたので、航空券の手配は翌朝にする。さらに町を歩くと、プライベートルームを持つ高級ホテルがあった。長期戦に備えた情報収集のためフロントへ向かうが、ここの警備は厳重で、荷物チェックも受けた。ここは一泊三食付きで一五〇ドルという。私のナショナルティを最初に聞いてから、奥の部屋に行って確認してきたので、国籍により料金（または通貨）が違うのかも知れない。そういえばスイガラに着いてすぐにダニエルが「ここはロシア語の看板ばかりだ」と驚いていたように、ロシアや東欧からの観光客が多く、皆、のんびりと休日を楽しんでいた。しばらく歩いてから、テレビのついている屋外レストランに入った。

ダニエルが何も食べたくないというので、ビールだけ注文。飲めない私も少し付き合った。それまで車の中だけでしか感じられなかった安全が、ここでは半径二〇〇キロにわたって保証されている。ダニエルの表情は、その開放感にあふれていた。テレビはアラビア語であったが、店員に聞くと、スエズで武器などを用意していたグループが当局につかまったという。国営放送は、国内の安定を強調しなかったのだろう。その映像ばかりが流れていた。ニュースが終わると、アラブの陽気な音楽ビデオの放送に変わった。

落ち着いたところで、私たちは明日以降のことを相談した。その間もダニエルは携帯でテキストメールの送受信を続ける。エジプトから出るための国際線の手配について話すと、彼がそうしようと言いに、私の分についてもスイスの旅行社に勤める友人に頼めるだろうと言い、メールを送ってくれた。スイスの友人も心配をしていたのだろうか、すぐに返信があり、明日の朝一番でできるだけのことをすると伝えてきた。ダニエルは、自分もエジプトに長くいたくないので二枚を確保したいとし、とにかく空きがあったら早く抑えられるように、私の名前と国籍、パスポートナンバーまで送信してくれた。しかし、結果がわかるのは、スイスの旅行会社が開いてからで、エジプト時間の翌朝九時半以降である。

私は、このような事態の場合には早朝一刻も早く空港へ行くべきだと主張したが、慎重なダニエルはスイス旅行社の結果を待ってからと言う。その時である。ダニエルの携帯にスイス大使館からのメールが入った。エジプトにいるスイス国民は、全員、翌朝の外出禁止令が終了する八時に空港へ行き、出国の可能性を探れという。⁽²³⁾ 話は決まった。八時にロビーに集合してタクシーで空港へ行くことにし、しばらく歓談した後でホテルに戻った。

十時半頃、部屋に戻り、朝ホテルで確保しておいたゆで卵とパンを食べた。その後も、モーニングコールの指定、予約してあったホテルをキャンセルするための電話、スピードボートの乗り場を調べるなど、やらなければならぬことが多く、慌ただしく部屋とフロントを行き来した。シャワーを浴びて落ち着いたのは夜中の十二時前。日本時間では月曜日の朝六時になるところだったので、しばらく眠らず、時間を見て電話をかけて家族の声を聞いた。その後、ドラマ（映画？）しかやっていないテレビのチャンネルを回し、やっと落ち着いて寝ることができた。

一〇 ハルガダ空港 エジプトとの別れと最後の一撃

一月三十一日（月）、モーニングコールを頼んでいたにもかかわらず、四時半頃には目が覚めてしまった。一時間ぐらい経って、コーランの朗誦が聞こえてきた。これまではリゾートホテルにいて忘れかけていたが、ここはイスラムの国なのである。外はまだ暗かったが、少し歩いてみることにした。人通りはほとんどなかったが、時折タクシーは通るし、ホテルの隣のレストランや雑貨屋はまだ営業していた。今にして思えば、ロンドンに帰る前にハルガダで新鮮な魚料理を食べておくべきだったが、この時はそんな余裕はなかった。道路の修理やホテルの建築などで、町中が工事中という感じで落ち着かなかった。一度部屋に戻り、七時に朝食のレストランへ。出されたオムレツ、生野菜とチーズ、青い砂糖のかたまり（ジャムの代わり？）、そしてアエシを食べた。荷物を整理してフロントへ行くが、ダニエルはいなかったもので、もう一度外出し、今度はパブリックビーチへと足を伸ばした。入場料一五ポンドと書いてあったが、「ちょっと見るだけ」と言ったら、入れてくれた。エジプトは



ハルガダのパブリックビーチ

メーターは七ポンドぐらい、空港に入る時に入場料を払ったみたいだったが、バックシーシを含めて三〇ポンドで十分と判断し、私のポケットから運転手に渡した。

飛行場には、二〇〇人ほどがいただろう。オランダとロシアの団体旅行者のようだったが、皆、荷物検査を受けるゲートの前に列をなし、焦っている様子はなかった。トーマスクック（旅行社）のオフィスを見つけたが、誰もいない。エジプト航空のオフィスはコラ地区の町にあるだけで、飛行場にはないという。ディパーチャー・ボードを見ると、カイロを含む国内便はなく、モスクワやキエフの名が見える。昨日町を歩いて多くのロシア語を目にした時、たとえ行き先がロシアでも当日のチケットが手配できたらそれで行くべきか、という考えが頭を過ぎったが、

今日も快晴。この時期は毎日がどんよりした天気。ロンドンを思い出し、太陽は平等に降り注がないなどと考えていた。ビーチには早朝にもかかわらず、気持ちよさそうにくつろいでいる高齢の婦人がいた。私は紅海の水に少しだけ触れ、写真を撮って帰った。

八時前だったが、ダニエルも待つており、すぐにチェックアウトしてタクシーを拾った。料金交渉はダニエルのアラビア語でやり、三〇ポンドとなった。

八時半、空港到着。タクシーの

それが現実のものになってきた。ビザは空港で取れるだろうか、エジプト旅行のために防寒対策が不十分だ、などという心配（今となっては杞憂）までしていた。

そんな時、エジプトの旅行社の社員らしき人を捕まえることができた。「どこでも良いから、国外に行く便のチケットを二枚手配できないか？」と尋ねると、荷物検査のゲートの方に連れて行かれ、（トランシーバーを手にした）空港職員らしき人を紹介された。彼の「どこに行きたいか」という問いに、「ヨーロッパならどこでも」と答えると、「午後二時の便があり、三〇〇ユーロで手配できるだろう。行先はたぶんフランクフルトだが、直前にならないと席があるかもわからないし、航空券も発券できない。現金がなければ、手配できるとわかった段階で荷物チェックのゲート内のキャッシュディスプレイペンサー（現金引出機）のところへ連れて行くので、カードで引き出すことが可能だ」という。私はとっさの判断で「OKだ。友人を連れてくる」と言い、ダニエルを連れて戻ると、金額が三二〇ユーロに上がっていた。また、彼を紹介した人は「チケットを買ったら、彼に四〇ユーロぐらい払え」と小声で言う。小さいことは言っていられない。とにかくチケットの確保を約束させ、十一時頃にまた伝えに来るといので、指定されたカフェテラス（この時は営業していなかったが）で待つことにした。もしかしたら、今日中に国外へ出られるかも知れない。しかもフランクフルトならばハブ空港だから、ロンドンにもジュネーヴにもすぐにフライトがあるはずだ。もちろんブリティッシュエアウェイズだって多く乗り入れている。私たちに希望が見えてきた。

この間、ダニエルの携帯にスイスの旅行会社の友人からメールが入り、チケットの手配はできるだけ空港でした方が良いと教えられた。とにかく

く数少ないチャンスを確実にものにしなければならぬ。今ある現金を数えた。私は、複数の財布と定期入に現金を分散させていたが、一一〇ユーロ、三八六米ドル、四五英ポンド、そして一万円と残りのエジプトポンドがあることを確認した。ダニエルが携帯で調べた最新の為替で、一〇〇ユーロと三〇〇米ドルを出せばおつりが来ることがわかり、それを支払いに充てることにした。ダニエルはもっと複雑で、ユーロと米ドルとエジプトポンドの三種類の紙幣をまぜて用意し、その計算表を作成した。

現金の準備ができてカードで降ろす必要がなくなると、今度は交互に荷物番をしながら、飛行場の様子をチェックしたり他の情報を収集したりするために歩き回った。テレビは相変わらずカイロのデモを伝えている。団体旅行者はトランプなどをしてリラックスしていたが、中には深刻そうな顔をしている個人旅行者もいた。ロシアからハルダカに働きに来たという女性（恐らくダンサーか）は、怖くなって今空港に来たけれども、EU諸国ではビザを得られないから、直接ロシアへ行く便を探すと言っていた。韓国から来たグループは、トルコ航空を利用しエジプトへ来たが、帰りの便についての情報が全く得られないと言っていた。改めて、個人で変更のきくチケットを手配していたことが効を奏したと思った。また、日本へ帰るとなればカイロ空港へ向かわざるを得なかっただろうが、行き先がロンドンであったので、とにかく一度エジプトを出てしまえば何とかなる、という安心感があった。

そんなことを考えながら歩いていた時である。新たに空港に到着した一団が、荷物チェックのゲートに入っていく。十時四十分頃だったと思う。何かあるのではと近づいてみると、さっきとは別の空港職員が「チケットがほしいか」と声をかけてきた。前の彼とどのような関係かはわ

からない。ここで声をかけてきたのは、背が高く恰幅の良い二十代後半の男性（肌は白かった）で、半袖の制服シャツを着ていた。名前を聞かなかったが、これからも私たちの出国やエジプト経験に重要な役割を果たすので、彼のことを職員Bとする。私は即座に「ヨーロッパなどどこでも。できれば二枚」と言うと、「三二〇ユーロで十二時発のミュンヘン行きを用意できる」という。チケットもちゃんと出るかと尋ねると、大丈夫だといいながら、エジプトの旅行社の事務所の方へ行く。これは確実かも知れないと思い、少し待ってもらって、急いでダニエルのところへ行く。「動き出した。急げ。ミュンヘン行きだ」と声を上げた。荷物を持って二人で事務所へ行き、用意していた現金とパスポートを職員Bに預けた。⁽²⁴⁾職員Bは「金額は確実か」と念を押した上で、そのお金を事務所の奥の背広を着た人に渡した。私はだまされてはいけなと、その人が金額を数えてから、パスポート情報をコンピューターに入力する様子⁽²⁵⁾を注視していた。

そして、ボーディングパスが用意され、パスポートと一緒に渡された。座席番号も書いてある。「これで確実だ」と思ったら、職員Bにすぐに付いてこいと言われ、荷物チェックのゲートへ行った。空港職員通しで内通しているからであろう、水やラップトップパソコンを持っていたにもかかわらず、形通りに検査機へ通すだけで中に入れた。さらに「こっちだ」と言って案内されたのは、チェックインカウンター。団体客の列の一番前に私を呼んで、最初に荷物預けやチェックインの手続させた。続いてダニエル。この時、例によってバックシーシの要求がなされた。器用なもので、右手でコンピューターを操作しながら、左手で合図するのである。私は、五〇〇ポンド以上あったと思われるエジプト紙幣を全部、その左手に押し込んだ。ダニエルが払わなかったことに少し首を傾げた

が、時間もなかったのだろう。私たちは別の職員に付いていくように指示された。その職員が出国ゲートまで案内すると、私は「これが最後の現金だ」と言って、ポケットからエジプトポンドの貨幣（一〇ポンドぐらい）を渡し、出国審査の列に並んだ。この時、ダニエルも五ドルを彼に払ったらしい。

出国審査は、簡単なもの。いつ来たかと尋ねられ、「四日前だけれど予定を変えて逃げ帰るところだ」と話しているうちに、判が押されていた。ゲートを抜ければ、ここはエジプトではない。いよいよ出国を確信し、搭乗口へ行く。まだ十一時を少し回ったぐらいだったと思う。自分たちの飛行機をボード上で確認し、お互いの健闘を讃え合って、記念写真を撮る余裕さえあった。この時、ダニエルがとんでもないことに気づく。私のボーディングパスの名前が「マニラ」になっているという。エッ！確かに「MANILA/TUI」だ。でも出国審査は済んでいるし、搭乗時に問題にされたら、事情を説明して入れてもらえると、さほど心配はしなかった。⁽²⁶⁾それより、こんな失態はエジプトでしか起こらないだろうと、写真を撮っておくことにした。

空港に着いてから三時間も経っていない。今朝までの心配が嘘のようだった。飛行機は「TUI」という、ドイツの格安航空会社のもの。その黄色いボーディング767の機体が私たちの目の前に停まっている。ドイツのチャーター便であったようで、周りはドイツからの観光客だけだった。⁽²⁷⁾ディパーチャー・ボードの記載に遅延（Delay）が揭示され、離陸は十二時四十五分となったが、ここでの数十分の遅れは問題にならず、むしろゆとりを感じさせた。朝食を食べていなかったダニエルはハンバーガーを買って頬張り、私はエジプトで一度もできなかった土産物あしりをした。ところが、信じられないことに、この後でエジプト最後の一撃が

待っていたのである。

十二時十分頃、ディパーチャー・ボードに「開始(Open)」のサインが付き、搭乗者が列を作り始めた時である。私たちのチケットを手配した職員Bが、血相を変えてやってきた。「おまえらの払った金が少ない」と札束を見せながら怒っている。先ず私に「お前はいくら払ったか」と聞くので、「一〇〇ユーロと三〇〇ドルだ」と言うと、三〇〇ドルを(どういうレートを使ったのか理解できなかったが)一九三ユーロにしかならないと紙に書いて見せる。私はエジプト人が独特な換金計算をするので教えられていたので、手元に残っていた一〇ユーロ紙幣をその場で手渡した。今度はダニエルに対してである。ダニエルはユーロ・米ドル・エジプトポンドの三種類の紙幣を組み合わせて払ったから、余計に付け込む隙があったのだろう。職員Bは「一〇〇ドル足りない」と言う。「そんなはずはない」と否定するダニエルに対し、さらに怒りを増幅させて、「おれはお前たちのフライトを今からキャンセルすることができ。別の部屋に行こう」と言う。ダニエルと私は以心伝心、前日にヤスで経験したエジプト人の「火事場泥棒」的金銭要求であることを見抜いたので、別の場所へ移ることは断固拒否し、我々の渡したものは正確であると主張した。それでも引き下がらない職員Bに対し、ダニエルは前に書いてあった計算表を出し、ドイツ人の列に行って大声を張り上げる。今度は二人して戻ってくると、職員Bは「とにかく金が足りない。お前ら二人のどちらかがごまかしている」と言い放つ。途中、口出しをするドイツ人も出てくるなど、混迷を極めたが、私が「一〇ユーロ程度の計算間違えはあったかもしれないが、私たちが貴方に渡した金額は正確で、それを旅行社の事務所でコンピューターに入力する人に渡したところまでちゃんと見ている。君たちの方がおかしい」と言い、ダニエルも加勢

すると、職員Bは私たちのボーディングパスを取り上げることもなく引き下がった。

「とんでもないやつだ」と二人で呆れていたら、五分もしないで職員Bが戻ってくる。今度は私を標的にして「今、空港に設置してあるビデオで確認したら、(ダニエルの払った金額は正しく)お前がごまかしの張本人だ」と言う。馬鹿も休み休み言え。ダニエルが渡した紙幣は三種類で計何十枚にもなる。それをビデオで確認できるわけがない。しかし、職員Bは体格も立派で、その迫力は大したものである。またさっきのドイツ人が口を挟むし、搭乗時間は迫っている。私は職員Bの隣に行き、「私たち日本人はこういうのが大嫌いだ。でも、万が一でも貴方を含む三者のいずれかに誤りがある可能性があるのであれば、それは分け合うのも仕方がない。さっき一〇ユーロを渡したけれども、ここに最後のドルがある。これでおさめよう」と言い、二〇ドル札を彼の手に握らせた。やっと一件落着となったが、今にしてみれば、これからの日本人旅行者や世界の旅行者のためにも、渡すべきではなかった二〇ドルだったと思う。

不満は収まらなかったが、ダニエルと私も荷物を持って列に並んだ。搭乗が始まる。何と驚いたことに、職員Bがボーディングパスの半券を切っているではないか。私は「この男が!」と大声を上げた。すると、さっきまで白熊のように威圧感のあった彼が、ウサギのようにおどおどした表情に一変した。少しは罪の意識があるのだろう。私の番が来た時、「インターネットが再会したら、君は世界中に有名になっているよ」と言ってやると、「どういう意味か」と尋ねるので、「特に優しいからね」と返しておいた。それから、飛行機まで移動するバスに乗った私たちがちらちら見ている。ダニエルが周りの人にドイツ語で話していたのが

心配だったに違いない。

それでも彼は反省などしなかっただろう。空港に勤める職員として、海外からの観光客からいただけるものをいただきただけだ。最初にチケット代として受け取った三二〇ユーロだって、彼らで山分けする上乗⁽²⁸⁾（もしかしたら全額）があつたに相違ないと思つてゐる。この時のハルガダ空港はまだ平穏だったが、この後もエジプト情勢は混迷を続け、日本やイギリスを含む諸外国の大使館が国外退去勧告を出した翌二月一日以降は、私たちのような国際便のチケットを求める旅行者が何十倍にも増えたに違いない。その時に彼らが不正に受け取った代金・御礼（バックシシ）は計り知れない額になつたのではないだろうか。民主化を求めるデモが各地で展開する最中に、こうやって自分たちの地位を利用して自分の稼ぎだけを追求するエジプト人が無数にいたかと思うと、この国の将来を楽観視することはできなかった。

一 ロンドンへの帰還とその後のエジプト情勢

無事に飛行機に乗り、座席に着いた。窓側の席でなかったのは残念だったが、贅沢はいえない。ダニエルは新聞を取ってきたが、全部ドイツ語だったので、エジプト関連の記事のみ訳してもらい、また、携帯に入つていたメールの情報も教えてもらった。カイロのタハリール広場におけるデモは（平和的で戦車に市民が乗る写真が掲載されていたが）いよいよ膨れ上がり、ムバラクがいつまで持つかという論調も見られた。驚いたのは、カイロの考古学博物館も襲撃・盗難に遭い、その盗難者の中には職員もいたという目撃証言があつたこと。また、警察に監禁されて銃を向けられたという恐怖を語つた旅行者の記事もあった。カイロ市



上空から見たカイロ（ダニエル撮影）

内から空港へと移動するバスの中に市民が乗り込んできて、お金を要求し、払わないと引きずり降ろされたともいう。カイロ空港のフライトはキャンセルや遅延が相次ぎ、そこに寝泊まりする人々であふれたという。⁽³⁰⁾ ハルガダ空港とは対照的な混乱を知り、改めて自分たちの選択の正しさと幸運を喜び合つた。

離陸してしばらくは紅海（スエズ湾）の上を飛ぶ。珊瑚礁がわかるほど美しい海と青い空、その間に赤茶色の大地や山が続いていた。

わずか四日間の滞在でアフリカ大陸に別れを告げることになるとは思わなかった。一時間ほど経つと、ダニエルが「カイロだ」と言う。シャッターを切る彼の隣から、ナイル川の両岸に広がる市街地を見て、新しい歴史を作るための胎動にエールを送ると共に、それに振り回された自分を省みて、四日前のカイロ空港での出来事やナイル川上流で見た壮大な神殿などを思い出してゐた。機内食を食べ終わってしばらくすると、地中海の上空に出た。興奮から冷めない私は、靴からラップトップパソコンを取り出し、歴史的瞬間をかすめた私の体験を記すべく準備を始めた。飛行機は約四時間半でミュンヘン空港へ着いた。エジプトとの時差は一時間で、現地時間の四時十五分だった。ここから電車で職場のあるイスの首都ベルンに帰るといふダニエルと、再会を約束して分かれた。

私は、二週間もエジプト滞在が短くなり、ミュンヘンなどでドイツの博物館を見学するのも悪くないなどと考えてみたが、空港の雪景色（すでに雨になっていたが）を見て、第一にはロンドンへ戻る方法を探ることにした。

荷物を受け取ってディパーチャー・ホールに行くと、ボードの一番上には一時間後のロンドン行きブリティッシュエアウェイズ便が記されていた。急いでカウンターに行き、事情を説明してカイロ発のチケットの変更を願った。ワンワールドのチケットとはいえ、発券が日本航空でなされていたので、普通の手続きでは無理だという。日本航空のカウンターはないかと尋ねると、ミュンヘンにはないという。それでもブリティッシュエアウェイズの職員は「SOS」を出して同僚を呼び、さらに奥からも別の職員が来て、三人がかりで「文殊の知恵」を出し、コンピュータを操作して希望のフライトを手配してくれた。にもかかわらず、バックシシを求める左手が誰からも出てこなかったことは言うまでもない。ボーディングパスを受け取ってすぐに出国ゲートへ。EU諸国の出国は簡単だが、滞在日数を聞かれて「二十分」と答えた日本人には驚いただろう。次の荷物検査で、エジプトから持ってきた水を取り上げられた時には、安全に対する徹底さも比較にならないことを痛感した。時間は限られていたが、すぐにビジネスラウンジへ向かい、英字新聞を手に入れた。The Independent 紙は第一面に、ムバラク大統領の写真を焼いて怒る民衆の顔を大きく掲載していた。

飛行機に乗れば、そこはイギリスである。搭乗員の「ハウ・アー・ユー（How are you?）」に対し、一度は「ファイン（Fine）」と答えながら、「実はエジプトから逃げ帰ってきたので、少し興奮している」と伝え、席に着いた私にエジプトの話を聞きに来た。ビジネスクラス

の乗客が私の他に一組しかおらず、担当の搭乗員も暇だったのだろう。離陸後の飲み物を尋ねてきた時、飲めないにもかかわらず「シャンパンある？」と聞くと、「貴方のために開けますよ」との返事をもらう。英国流の受け答えがとても嬉しかった。ロンドンまでは一時間半。新聞を読んで、軽食を食べて、暗くなった空を眺めていたら、すぐに離陸体勢に入った。そして、街の灯りに黒く浮かび上がるテムズ川を確認した時の感慨はひとしおであった。

ヒースロー空港に着陸したのは、（ヨーロッパ大陸とまた時差が一時間）七時十五分。先頭を切って入国ゲートに行ったが、そこでも、今まで味わったことのない快さを感じた。携帯に電源を入れて、心配しているであろう人たちにメールを送りながら、地下鉄とバスを乗り継いで家に向かった。その途中、スーパーで買い物をすることもできた。帰宅したのは、八時五十分ごろ。何とエジプト出国に何日かかるかと心配しながらハルガダの安ホテルを出てから十四時間、エジプト滞在の予定変更を決めてから三十二時間しか経っていなかった。あの混乱したエジプトで、遺跡の見学を楽しんだ後、このわずかな時間で帰宅できたのは、ダニエルとの出会いと様々な幸運が重なったからに他ならない。改めて感謝した。また、出発以来アクセスすることができなかったインターネットを通じて、心配をかけた日本の家族・大学職員・知人にお詫びした。帰宅後もエジプト情勢から目が離せなかった。それまでロンドンではほとんどテレビを見なかったが、連日トップニュースで伝えるBBCとSkyのニュース番組に釘付けになった。その他、夕方六時から夜十一時までは、アルジャジーラの英語無料放送があったが、さすがはアラブの放送局、英国の報道より多角的で、特に私が目にしたようなムバラク親派の生活や意見、カイロ近郊の観光業の打撃、困惑するガザの様相を

伝え、イスラエルとアラブ諸国の有識者の衛星中継対談をやるなど興味深いものだった。また、アルジャジーラだけがタハリール広場のことを「リバティー・スクエア（自由広場）」として報道していた。いずれにせよ、距離が近いこともあって、日本のニュースよりは取り上げ方が大きかったことに違いはないだろう。

チュニジアで発生した長期独裁政権に対する運動が飛び火する形で、エジプトに大規模デモが発生したのが一月二十五日で、私が滞在中の二十七日以降、混乱の度を増し、二十八日（金）にはデモが与党国民民主党（NDP）の本部を炎上させたことなどは折に触れて指摘したが、何と死者の数は累計で三〇〇人を超えたと知る。帰宅した三十一日（月）、軍は静観しているものの、デモは一向におさまっていなかった。その様子はニュース専門チャンネルでは二十四時間休みなく中継されていたので、ほとんどエジプトのホテルにいるのと同じような気分になった。

二月一日（火）夜、ムバラク大統領は国营テレビを通じて、予定されている九月の大統領選には出馬しないが、それまでは任務を全うすると演説した。この時点で三十年間続いたエジプトの独裁に終止符が打たれることになったが、西欧の政府高官やメディアがこぞって政権委譲とデモへの指示を訴える中では、全く効力を発揮しなかった。大統領が世襲させたいと考えていたという二男ガマル・ムバラクのことに触れなかったのも、疑惑を広げ、大統領の即時退任を求める抗議の声はさらに昂まった。

二日（水）はもっと衝撃的だった。デモの民衆の中に、親大統領派の一団が車・馬・駱駝などに乗って乱入し、デモ側に死者が出た。やがて、この乱入は内務省下の秘密警察の仕業で、スナイパーがデモの主導者を

狙ったという見解が支配的になり、反大統領派に捕まえられた乱入者が身分証を持っていたという映像も流れた。テレビは長時間にわたり、この事実を突きつけて政府高官や与党幹部を追求したが、彼らは西欧メディアによる捏造との見解を変えなかった。

四日（金）、金曜礼拝後の大規模デモが呼びかけられ、さらに大統領への辞任要求が強くなった。五日（土）、大統領の二男ガマル・ムバラクと党首が国民民主党を離党した。デモも全国的に展開していった。アメリカのオバマ大統領やイギリスのキャメロン首相らが政権委譲を促す声明を出すなど、ほとんど外堀が埋められたかに思われたが、それでも大統領は辞任の意向を示さなかった。他方、野党代表者とスレイマン副大統領との話し合いも始まり、六日（日）には憲法改正の準備委員会や非常事態令解除などに向けた作業を行なう委員会の設立で合意したが、デモには全く影響しなかった。七日（月）、ムバラク大統領は声明を出し、多数の死者を出した反ムバラク派と親ムバラク派の衝突について調査する独立委員会を設立するように指示したが、これも焼け石に水であった。民衆はあくまで大統領の退任を求め、各地でストも発生した。

事態が膠着し、新しい動きが少なくなると、英国のメディアも扱いを小さくした。八日（火）になるとアルジャジーラ以外はトップニュースとしてエジプト情報を伝えなくなり、九日（水）午後以降は、BBCニュースがエジプトのことを報じない時間帯も多くなった。

それが十日（木）午後に一変し、カイロからのライブ映像が復活した。シャフィク首相がBBCに対して大統領辞任の可能性を語ったからである。軍も幹部による最高評議会を開き、タハリール広場のデモ参加者に「貴方たちの要求は達成される」と伝えた。民衆の期待は一気に昂まり、タハリール広場にはかつてない数の人々が集まった。他方、大統領は辞

任しないという説も飛び交い、混沌とする中で、誰もが注目する大統領のテレビ演説が始まった。しかし、その内容は「権限はスレイマン副大統領に委譲するが、大統領には留まる。外国の圧力には屈しない」というもので、多くの人を失望させた。内外から非難の声が上がり、落胆した民衆は翌日の金曜礼拝後にさらなる大規模デモを計画した。

また膠着状態に陥るかと思われたが、事態は翌十一日（金）にまた急展開する。午後のニュースで、大統領が家族とカイロからシャルムイッツェーフへ避難したと伝えられた。そして夕方、スレイマン副大統領のテレビ演説により、大統領が辞任し、軍に政権が委譲されたと伝えられた。私がこの一報を聞いたのは、この最終章を書いている時で、午後六時のラジオニュースだった。三十年間続いたムバラク大統領の独裁政治が終わった瞬間である。エジプト全土が歓喜にあふれた。人々が闘争を始めて十八日目にして勝ち取った「自由」を叫びながら祝福し合う姿は、翌十二日（土）まで中継され続けた。

一二 エピローグ 二つの「建国記念日」

私が紅海（スエズ湾）を挟んだシナイ山の対岸にあるハルダカから「出エジプト」し、ロンドンに戻って十一日目にして、エジプトの人々による民主化要求のデモは、三十年も君臨した独裁者を退陣させるという劇的な幕引きをした。当初の予定ではカイロ滞在中であり、（もちろん無理ではあったが）タハリール広場の喜びを目の当たりにしたかも知れないと考えると、身震いするほどの感動を覚えた。ロンドンを離れる前にも、またエジプト滞在中にも、そしてこの執筆を始めた時にも、全く予想できなかったことである。それはデモに参加していた人々も同じ

で、（期待はしていても）実現できるとは思っていなかったという。しかし、時計の針が回り始め、誰にも止められない方向へと世の中が急展開した。その運動は、アルジェリア・イエメン・ヨルダン・シリアなどにも伝わり、アラブ社会全体を変えようかという勢いになっている。まさに世界は、これからどう変化するのか予測できない、激変の時代を迎えたといえるだろう。

エジプトの人々が要求を達成した二月十一日は、日本の建国記念日にあたる。^③もしもデモに参加した人々がこれから順調に新しい「自分たちの国」を作り上げていったならば、エジプトの建国記念日が日本と同日に設定されることになるだろう。けれども、「建国」の意味は全く異なる。真の意味で「建国」といえるのは、エジプトの方であることは敢えて指摘するまでもない。国際社会が支援すると表明しているとはいえず、その道は容易ではないだろう。その困難さには、私が四日間という短いエジプト滞在中に感じたことも含まれていると思う。恐らくエジプトの人々も余り自覚していないことであろうし、マスコミも論じないことなので、この場を借りてまとめておくことにしたい。

私は四日間のエジプト滞在の記録を、単なる脱出劇としてではなく、比較文化論へのプロローグにしたいと思って筆を執った。そして見聞したことでなく、感じたことを正直に書いた。再読したいのは、ルクソールからハルガダへの移動中にダニエルに語ったことで、エジプトの観光の現状を「採取経済的観光文化」の段階にあるとした分析である。エジプトは、現在のイスラム・アラブ社会とは全く別の、古代エジプトの遺産を観光の目玉に据えている。その間には、ギリシャ・ヘレニズム・ローマの文化的影响を受け、さらにキリスト教文化が展開した時代もあった。そして七世紀中葉にアラブの支配を受け、古代エジプトとは

無縁の社会が形成された。そこに西欧の探検家・歴史家が来て「発見」されたものが、エジプトにおける観光の最大の「財産」なのである。ところが、その「財産」は、世界的にも最重要視されているが故に、エジプトによって守られている以上に、世界によって守られている。アスワンハイダム建設で水没の運命にあった多くの神殿を救済したのは、エジプト単独の力ではなく、ユネスコを中核とした世界の力である。エジプトも重要な役割を果たしたが、その割合は他国の文化維持に対する努力と比較すると格段に小さい。譬が悪いかも知れないが、現在の多くのエジプト人にとって、古代エジプト文明は自生していたリンゴの木のようなもので、しかもその美味しさを他人（西欧）から教わり、また木が衰えても他人（西欧）が治療し、その実を求めて無数の外国人がやってくるから改良しようとしめない。それは自然遺産についても同じで、紅海沿岸の美しさを認識しダイビングなどのレジャー開発をしたのは他人（西欧）であり、積極的な観光開発にエジプトの人々は限られた役割しか果たしていない。国家の中核をなす軍事も同様で、現在でもアメリカの年間支援は相当な額になっている。いずれも、自らの努力の割合が低い分だけ、その重要性を認識できないという点で共通しているのではないだろうか。⁽³²⁾

文化面でエジプトの学者や考古省の努力が足りないと言っているのではない。繰り返しになるが、その世界的な重要性に比して、自国の役割が小さくなっているとうことである。私を感じたことは、エジプトの人々がその重要性、つまり古代エジプト文明の真の価値を十分に認識できず、それ故に、自らの価値観と一体化した形での尊厳を持った文化発信方法が模索されないうに至っているということ、それを自ら耕作し収穫したものを売るという「農業」の段階に達していない、「採取経

済的観光文化」と規定してみたのである。そして、自分たちが何もしないで押し寄せる観光客に対して、採取したものを高く売ることしか考えない人が多くなり、私たちのような不快感を持つ旅行者が絶えないのではないかと思った。エジプトを離れる時、最後にハルガダ空港で土産物を探したが、その多くが「Made in China」であったのを見て、その思いを強くした。いくら中国のものが安く生産性が高いとはいえ、労働賃金の低いエジプトで自らの国の土産物を他国に作らせて輸入する。これは、インド独立運動でガンディーが展開したスワデジのイギリス綿製品不買運動の段階にも至っていない。

これを後進国の宿命のように考える人もいるだろうが、私は歴史教育の問題、教育におけるアイデンティティ形成の問題と考えている。そして、エジプトでこの問題を解決することは、二月十一日を建国記念日と設定できた日本とは比較にならないほど困難であることも認識している。日本の建国記念日（もとの紀元節）は、八世紀に成立した日本最古の歴史書（『日本書紀』）に基づいて明治の価値観で西洋の暦に換算して設定された。良いとか悪いとかの問題ではない。「日本」を規定する際、このような方法があるのである。ところがエジプト（および他の諸外国の多く）は、他国による征服とそれによる過去の文明の否定を繰り返し、その重層性の上に現在の国家があり、かつ現在も内外の問題を抱えている。その歴史を克服して自国の歴史を組み立てなければならぬ。特にエジプトのような古代文明の中核になっていた文化層を持つ国の歴史は、自国史でありながら世界史を書くようなものである。さらに民主化された国としてその歴史をまとめるとなれば、単に過去の事象を並べるのではなく、将来の国家像を規定する作業と表裏一体で、自らのアイデンティティが形成できるものに仕上げなければならないだろう。

エジプトの歴史だけではない。世界が混迷を続ける中、すべての国の歴史家が自国史と世界史の関係を問い直し、その記述方法を模索しなければならぬ。換言すれば、新たな世界観・文明史観を構築する努力を、様々な連携のもとに進めるべき時代に突入したということであろう。世界の注目を浴びている時にエジプトに滞在し、特別な異文化体験をして日本を中核とした比較宗教史の構築を目指す私も決して例外ではないと痛感するに至った。⁽³³⁾

おわりに

衝撃の大きさに比べて与えられた時間が短く、独断的な内容になってしまったが、何とか当初のロンドン帰還予定日までに書き終えることができた。エジプトを専門に勉強したわけでもなく、またカイロやアレクサンドリアという大都市に行っていない私が、短期間の滞在だけでエジプトやエジプト人を論じる資格などないことは承知している。不十分な情報に基づく偏見がある可能性も否定しない。特別な体験を強調した結果、エジプト人に対する印象を悪くしてしまったかも知れないが、それが本来の意図でないこともお断わりしておきたい。実際に、エジプトでは不快に思ったことに倍するほどの善意に触れ、多くの人々の笑顔から活力を得た。

エジプトの文化認識や教育についても、学校教育の現場を調査しないで現状の不十分さと将来への不安を述べたが、識者の指摘などを受けて、さらなる検討・訂正が必要になると思っている。もちろんエジプトの将来は今後も予断を許さないし、民主化が進んだとしても、多くの困難に直面し、これまでとは違った混乱が起こる可能性がある。けれども、今

回三〇〇人を超える死者を出したとはいえ、エジプトの人々はこれだけの規模の闘争を平和的に遂行した。また、デモに終止符が打たれた翌日（二月十二日）の午後には、ボランティアでタハリール（リバティ）広場の掃除をしている姿がテレビに映し出された。彼らには世界の見本になるような新しい歴史を作るという可能性があり、それを実現してほしいと思っている。その時には是非、エジプトを再訪して、今度は周到な準備のもとに、彼らと歴史・文化について語り合いたいと願っている。

注

(1) ワンワールドは日本航空（JAL）も加盟している航空会社の連携（グループ）で、加盟航空会社を利用して世界一周（同一方向のみ）のチケットを手配することができる。ワンワールドの場合、大陸数によって料金が決まる。有効期間は一年間で、フライト変更も可能。私の場合は、アジア・ヨーロッパ・北アメリカの三大大陸とし、長期間にわたることを考慮して、チケット変更がより簡単で空港ラウンジなども使用できるビジネスクラスで手配した。出国は、成田発でニューデリーまで日本航空便、二週間インドに滞在して、ムンバイからブリティッシュエアウェイズ（BA）でロンドンに飛来。各大陸で四回のフライトを使えるので、ヨーロッパの分で、ロンドンとトルコ（行きはイズミール空港、帰りはイスタンブール空港）、そしてエジプトのカイロ往復を入れた。エジプトはアフリカ大陸であるが、このシステムではヨーロッパに含まれていたからである。ちなみに、帰国は（同じルートで帰れないので）ロンドンからニューヨーク（ブリティッシュ航空）、そしてメキシコで一週間滞在して（当初メキシカン航空で手配していたが、同社の倒産によりアメリカン航空に変更）、ロサンゼルスから成田（日本航空）へと向かう予定。これを利用して、ロンドン・カイロ往復を、日程だけでなくヨーロッパ内であれば空港の変更も可能なチケットで手配していたことが、今回の私の行動選択の幅を大きく広げてくれた。

(2) 警察は内務省で、軍と対立する関係にあるという。内務省の警察関係者は、これまで民衆を弾圧する立場にいたので、身の安全を図って職場放棄したのではないかと言われている。二月一日にムバラク大統領支持のデモ隊を組織し、反大統領のデモ隊に銃撃などを加えたのも、内務省下の秘密警察とされている。

(3) ロンドンに帰ってから知ったことだが、一月二十五日のデモ発生以来、ピラミッド周辺は軍によって閉鎖されていたから、カイロに行ってもピラミッド見学は無理であ

- った。
- (4) ユネスコの活動により救済された神殿は他にも多く、中にはスペインのマドリッドにあるデポット神殿など国外に移築されたものもある。ただ、すべてを救済できたわけではなく、水中に取り残された神殿もある。
- (5) 大学教員の入場料は、英語で書かれたIDを見せると、学生と同じく半額になる。しかし、それを教えてもらったのはホテルに入ってからで、この日は知らずに一般料金を払っていた。また、アプシンベル神殿でも夜に音と光のショーがある。
- (6) カウンターで変更を願ったにもかかわらず、最初は予定通りの十時四十分のチケットを渡された。ところが、神殿に行く前に会った職員が私のことを覚えていてくれて、彼が頼むと一時間前のフライトに代えてくれた。また、この時、カイロから同じ飛行機に乗ってきた日本人と会話を交わすことができた。彼は、中東の企業でエンジニアの指導をしており、カイロには良く来ているという。一日の休暇を利用して神殿を見に来たそうで、荷物を何も持っていなかった。その日の内にカイロへ帰り、翌日出国と聞いていたので、恐らく大丈夫だっただろう。
- (7) この日発令された外出禁止令を受け、日本の外務省は翌一月二十九日付でエジプトに対する危険情報を「十分注意してください」から「渡航の延期をお勧めします」に引き上げた。また、エジプト政府は三十日に出外禁止時間を午後三時から午前八時までに延長すると発表した。
- (8) コムオンボとエドフではガイド付とした。最初は、列車を利用して一日かけて三つの遺跡を見てからルクソールへ入ることも考えていた。これだと一〇〇ポンドもかからないと旅行案内に書いてあった。しかし、日中の暑さやそれぞれの場所での交渉による体力消耗、駅に行く面倒、時間の節約などを考慮した。ヤスは、この時期はエジプト人の休暇シーズンで列車のチケットが取れないとも言っていたが、三十日に見た列車には相当の空席があった。
- (9) フィエラ島もアスワンハイダムの建設により水没する運命にあったが、神殿は隣の現在地アギルキア島に移転され、一九八〇年に再建築が完了した。
- (10) カードでの支払いには、さらに三五ポンドかかるというが、それはヤスが負担することとで合意した。
- (11) ヤスは私のことを韓国人と思っていたらしい。普通の日本人と違って、しぶとく金額交渉をしたからであろうか。
- (12) この時、ドライバーは一〇〇ポンドしかもっておらず、ボートの運転手に払う五〇ポンドが必要なので、二五ポンドを私が立替える羽目になった。
- (13) 夜間、誘導に従って移動しただけなので、至聖所内部のレリーフはゆっくり鑑賞できなかった。また、ここにはエジプト末期王朝からローマ期に到るまで様々な神殿

- が建てられ、ハトホル神殿などは教会に変えられてコプト十字が刻まれているというが、それらを確認することもできなかった。
- (14) 前日、ホテルにチェックインする前にボート乗場で働いている人(ムハンマド)が、専用ボートを持っていると言ってきて、翌朝八時四十五分から一時間二〇ポンドで四時間ぐらいと約束した。ところが、ホテルでヤスと話しているうちに必要とわかりキャンセルしようとしたのだが、そのムハンマドは夕方にはもう姿を消しており、翌朝も約束の時間にいなかった。恐らく、交渉の場でお金を取ろうとしたか、他に良い客が見つかったのだろう。
- (15) アガハーンは一九五九年に没したイスラムのイスマイル派の最高権威者。廟は婦人によって建てられた。
- (16) 日本時間の二十九日に行なわれたオーストラリアとのアジア杯決勝戦。前日にも何人かのエジプト人・ヌビア人から試合のことは聞いていたので、相当関心が高かったと思われる。子供は、周りのエジプト人がオーストラリアを応援したのに対し、自分たちヌビア人は日本を応援し、最終的に日本が三対一で勝ったと言った。しかし、後日確認したところ、スコアは二対一だった。とにかく私を喜ばせば、多くのお金ももらえると考えたのだろう。
- (17) ダニエルは、イシス・アイランド・ホテルに一泊で二二〇ユーロだったと教えてくれた。当日で割りのない料金なのだろうが、私の二泊分を払ってでも安全を買うという意識が伝わってきた。
- (18) コムオンボ神殿には新しく遺跡の北に博物館がオープンしたというが、ガイドは案内しなかった。また、医療器具を描いた他にはないレリーフの紹介もなかった。
- (19) エドフのホルス神殿至聖所で見つかった聖船はパリにあり、ここに安置されているのはその模造品である。
- (20) 後で私がハルガダ行きを決め、ヤスが追加料金を請求してきた時、この不誠実な対応を避けたが、それは全く問題にならないと言って、取り合わなかった。
- (21) 昨年十月から十一月にトルコを訪問した際に知り合った日本人旅行者が、この逆のルートでイスラエルからエジプト入りしてダバブに滞在したことを教えてくれた。また、シャルムイッシーフは、ムバラク大統領が二月十一日に退陣を表明する直前に、カイロから家族と避難した場所でもある。
- (22) ホテル名はゴルフ・ホテル(Golf Hotel)。入口やロビーは非常に暗かったが、建物内のレストランやコモアシャル(ビジネス)センターもあった。シングルで二〇〇〇円もしないが、これがリゾート地のホテルの平均的な値段という。通常、一階がグラウンドフロアで、その上が二階であるが、私の部屋二一四号室はその上の三階にあった。エレベーターは付いているものの、とても旧式で、手動扉の開閉には危険を感じた。

(23) 日本大使館がインターネットなどで日本国民のエジプト出国を勧告したのは、二日後の二月一日(火)であった。インターネット上のことで、この勧告をどれだけの日本人が認知できたかは、疑問である。

(24) この時、ダニエルがビザがハルガダ入国であったのに対し、私のビザはカイロ入国だったので、空港職員と旅行社の人との間で可否の確認があり、少し不安になったが、問題なかった。

(25) 私たちのバスポート情報を入力して発券手続きをしている間に、前にフランクフルト行きを手配すると言って私たちを待たせていた彼が慌たしく歩いて来て「チケットはどうなった」と聞く。「今手配してもらっている」というと、「いくら出したか」と聞くので、「三二〇ユーロ」と答えると、「自分なら二八〇で良かったのに」と少し悔しそうに言って去って行った。もとの値段はわからないが、もっと安くて、上乗せ分を職員と旅行社の社員で分け合ったに違いないと思う。ダニエルは、通常ならば一五〇ユーロぐらいだろうと言っていた。これがドイツのチャーター便ならば無料であったのかも知れないが、二月二日にイギリス政府がカイロ空港に送ったチャーター便は一人三〇〇英ポンド(約三五〇ユーロ)と報道されていたから、マージンが取られていたとしても法外な値段ではない。

(26) 国内線ではあるが、一月二十八日にエジプト航空を利用した時も、私の名前は姓と名が逆に印刷されていたが、全く問題にならなかった。なぜ「MANILA/TUIM」になったのかなかなか理解できず、苦笑いをするだけだったが、ダニエルとバスポートを見ながらお互いが訪問した国について話していた時、私のバスポートに押されたイギリス入国ビザには一番上に発行場所(Place of Issue)として「MANILA」と書かれており、その下に入国回数(NumberOf entrance)として「MULT」とあることに気づいた。旅行社の人は、これを入力し、しかもMULTをTUIMと間違えたのであろう。ダニエルのボーディングパスはバスポートの記載通りだった。日本のバスポート(旅券)の記載には、漢字表記が多く(私の場合はサインも漢字)、漢字文化圏以外ではその真が敬遠される傾向があるのかも知れない。しかし、その後問題にならなかったから良かったものの、お粗末である。

(27) もとの名のTUI航空(TUI Airlines)は、七ヶ国の航空会社の共同ブランド名となり、リゾート路線を運行する会社としては欧州最大規模であるという。

(28) 現在、TUI社に対しウェブサイトを通じてメールで、御礼と共に私たちが乗った飛行機の正式な値段を尋ね、併せて空港職員の対応についても報告をしたが、返信は得られていない。

(29) エジプト考古省による二月十三日の発表では、盗難者に職員がいたかには触れていないが、盗難された収蔵品は、銚を打ち込むツタンカーメン王像(木造金箔、女神

に運ばれるツタンカーメン王像(木造金箔)、供物を捧げるアメンホテプ四世像など十八点にのぼるといふ。

(30) ロンドンに戻ってから聞いたことでは、カイロ空港に寝泊まりした旅行者に段ボールを売るエジプト人がいて、最初は一ポンドで売っていたものが、三ポンドに上がったという。きっと、私に最初のエジプト「洗礼」をしてくれた青年は、相当儲けたことだろう。

(31) 副大統領の声明が出たのは現地時間の午後六時で、日本時間では二月十二日になっていた。

(32) 軍事面については、日本に対しても全く同じだといえるかも知れない。

(33) 政治的には様々な立場があり、日本の歴史学界も、それに左右される傾向が認められる。政治に直結する議論も重要ではあるが、それ以上に、文化史を論じるという姿勢で様々な見解を論じ合うべきで、そのためには比較史の視点が不可欠だと思われる。

